

東西諸國の浴場の今昔

最古の浴場は希臘

「苦惱が人生である」といつた厭世哲人シヨペンハウエルをして「入浴のみは人生の快事である」と云はしめた其の浴場は、生活上から、又宗教上から、太古より發達を遂げてゐたものである。

歴史上の記録及び遺物について類例をたどり遡れば、最も明かになつてゐるのはギリシヤからである。暖國であつたため、多くの必要を感じたのでもあらうが、公衆浴場（蒸風呂）も古くから出來て居つたやうである。

羅馬カラカラの浴場

浴場について、すぐれた發達をしてゐたものはローマである。ローマ帝政時代の末期には、驚くべき大規模の浴場を造つたもので、それが有名なカラカラの浴場である。現在は其の大半は破壊されて、古への面影を見ることは出來ないが、残されたものによつて其の

規模の一斑を知るに難くはない。高さ二十尺、廣さ三萬二千坪の石で築かれた臺の上に建てられたものがそれである。

中心に約八千坪、其の中には、温浴、熱浴、冷水浴の部屋が分けられてゐたもので、冷水槽は四百六十餘坪のタンクで、數千人が同時に入浴し得た程である。温浴、熱浴共に蒸氣であつて、釜場は其の二十尺の臺の内にあつたのである。

八千坪の大浴場をとりまく廣場は運動場になつてゐて、其の運動場を、特別浴場、食堂、劇場、音楽堂など。がとりかこんで、あらゆる娯樂の機關が備へられてあつたものらしい。内部の美觀は殆ど言語に盡せない。ところどころに残つたモザイックの床や壁、大理石の柱など、當時の壯麗を思はしめる。ローマは斯の如く豪華を竭して遂に滅びたので、爾來贅澤を極めた浴場はなくなつた。

土耳其の蒸風呂

尙ほ歐羅巴で面白いのは土耳其風呂である。それは蒸風呂であつて、冷室から漸次幾つ

かの室を経て熱い部屋に到る。温度は人々の好みによるのである。沐浴の方法は、數分間、蒸氣に體をあてゝゐると、程よい頃に體を洗ふ人が來てタオルを持つて體中を擦すつてくれるのである。今日でも其の様式で行つてゐるのはロシアと土耳其などで、それ等の浴場には附屬した食堂があり、浴後一杯の茶ですます事も出来るが、酒もある。その他色々の娯樂の設備もあるので、簡單ですませなくなるのが多數である。

寶石を鑲めた印度の浴場

・浴場については東洋にもう一つ驚くべきものがある。印度モグール朝の皇帝シャー・ジヤハンがデリの宮殿の中に建てた風呂場で、人工の美の限りを盡したものである。古今を通じて世界一の美人であつたらうと稱せられてゐる皇后アルジュマンド・バヌの死後、皇帝は彼の陵墓としてアグラの都にタージ・マハールを造り、其の塔の頂きを仰いで朝夕思慕の情を遣つたと云ふ其の皇后のために造られた浴室である。全部が純白の大理石で疊まれ、四方を周らす壁の文様は、寶石の通りな色の寶石を以て鑲められてゐる。ダイヤモンド

ドや眞珠は見當らぬが、その他の寶石は、殆どみな使はれてゐる。皇帝は晩年に閉せられ、死後は皇后と共にタイジ・マハールの内に永眠してゐるのである。

羅馬の昔に比すべくもない支那の浴場

更に興味あるは秦の始皇帝の開いた西安附近の驪山の温泉で、唐の玄宗皇帝に及んで大擴張をなしたのが華清宮で、白樂天の長恨歌に「凝脂を洗ふ華清の池」とあるのがそれである。三千の寵を一身にあつめた楊貴妃との物語を残したところであつて、今でも石で疊んだ水槽が遺つてゐる。

現今の支那に至つては言語道斷である。三十餘年前の體驗であるが、湯は臭くてドロドロである。大きな湯槽の水を一週間も十日もたゞへて置いて、汗垢まみれの人が這入つて来て、洗ひ場がないため、湯槽のへりに腰をかけてその中へボロ／＼と汚垢を落しこむから、忽ちに湯がきたなくなる。上り湯はあるが、非常に高價なもので、別に錢を拂はねばならぬ。

日本の寺々の浴場

日本の風呂は、佛教渡來後、主として伽藍の境内に浴室が設けられたもので、本來蒸風呂であつたのである。浴室は、堂々たる獨立の一字で、その中央に浴槽を作り、前を脱衣場、後を釜場とした型である。大きいのは、十數人が同時に入浴出来る程のものがある。今残つてゐるもので有名なのは、

- 東大寺の浴室（應永年間）
- 法隆寺の浴室（室町時代）
- 興福寺の浴室（應永年間）
- 東福寺の浴室（室町時代）
- 大徳寺の浴室（江戸時代）

其の外に珍らしいものでは京都西本願寺の中にある飛雲閣に連接して秀吉の浴したといふ風呂がある。それは湯槽の上に唐破風の屋根をこしらへ、三方をかこみ、別に下に洗場

が出来てゐる。今一つ、光明皇后が癩病患者のために浴を賜ひ、自ら洗はれたといふ談の残つてゐる奈良般若寺の下の長屋が、それであるといふが、これは確かに間違ひである。鎌倉時代の名僧忍性が十八間に幅二間の長屋を造つて天下の窮民に提供し、五ヶ所に風呂を作つて興へたとあるのが其の長屋である事が確かにされた。今も浴室に關して古い形式を残してゐるのは禪宗の伽藍に多い。

錢湯の繁昌する我國

公衆の錢湯といふものは、室町時代からあつたらしいが、江戸時代に到つて大發展をなした。天正九年伊勢興市なるものが錢瓶橋の附近に錢湯を作り、永樂錢一文で入浴せしめたのがはじめであるといひ、それから急に其の數が増した。寛政中に松平定信公が男女の混浴を禁じたが、それ以前は自由であつた。然し其の命令も忽ちに又亂れた、天保年間水野忠邦が更に混浴を嚴禁したが、それもまた亂れて、更に明治五、六年の頃、禁令が下つた。然し混浴を禁じたとは云へ、浴槽は一つで、ただ中を板でしきつて、男女を區別した

丈であつて、入口は一つであつた。今日のやうになつたのはまだ比較的新しい事である。柘榴口から這入つて、湯氣ぬきのない陰鬱な風呂は、古稀の人達は、はつきりとおぼえてゐられる程のことである。

世界で一番湯浴み好きは、日本人だといふことは本當である。

「ばけもの」の研究

ばけものゝ研究と云つても、別に専門的に調べた譯でもなく、又さういふ専門があるや否やをも知らぬ。兎に角私は、ばけものといふものは非常に面白いものだと思つて居るので、之に關する、ほんの漠然たる感想を、聊か茲に述ぶるに過ぎない。

私のばけものに關する考へは、世間の所謂化物とは餘程範圍を異にしてゐる。先づばけものとはどういふものであるかといふに、元來宗教的信念又は迷信から作り出されたものであつて、理想的に或る形象を假想し、之を極端に誇張する結果、勢ひ異形の相を呈するので、之が私のばけものゝ定義である。即ち私の言ふばけものは、餘程範圍の廣い解釋であつて、世間の所謂化物は一の分科に過ぎない事となるのである。

世間で一口に化物といふと、何か妖怪變化の魔物などを意味するやうで、極めて淺薄らしく思はれるが、私の考へて居るばけものは、餘程深い意味の有るものである。特に藝術的に觀察する時は非常に面白い。

ばけものゝ一面は極めて雄大で、全宇宙を抱括する。而も他の二面は極めて微妙で、殆ど微に入り細に渉る。即ち、最も高遠なるは神話となり、最も卑近なるはお伽噺となり、

一般の學術、特に歴史上に於ても、又一般生活上に於ても、實に微妙なる關係を有して居るのである。若し歴史上又は社會生活の上から、ばけものといふものを取去つたならば、極めて乾燥無味のものとなるであらう。随つて吾々が、知らず識らず、ばけものから興へられる趣味の如何に豊富なるかは、想像に餘りある事であつて、確にばけものは社會生活の上に最も缺くべからざる要素の一つである。

世界の歴史風俗を調べて見るに、何國、何時代に於ても、化物思想の無い處は決して無いのである。然らば化物の考へはどうして出て來たか。之を研究するのは心理學の領分であつて、吾々は門外漢であるが、私の考へでは「自然界に對する人間の觀察」これが此根本であると思ふ。

自然界の現象を見ると、或るものは非常に美しく、或るものは非常に恐ろしい。或は神秘的なものがあり、或は怪異なものがある。之には何か其奥に偉大な力が潜んで居るに相違ない。此偉大な現象を起させるものは人間以上の者で人間以上の形をしたものだらう。此想像が宗教の基となり、化物を創造するのである。

且又人間には由來好奇心が有る。此好奇心に刺戟せられて、空想に空想を重ね、遂に珍無類の形を創造する。故に化物は各時代、各民族に必ず無くてはならない事になる。隨つて世界の各國は其民族の差異に應じて化物が異つて居る。

ばけものが國によりそれぞれ異なるのは、各國民族の先天性にもよるが、又土地の地理的關係によること非常に大である。例へば日本は小島國であつて、氣候溫和、山水も概して平靜で、別段高嶽峻嶺深山幽澤といふものも少ない。凡てのものが小規模である。その我邦に雄大な化物のあらう筈はない。

古來我邦の化物思想は甚だ幼稚で、或は殆ど無かつたと言つても可い位だ。日本の神話には化物の傳説が甚だ少い。日本の神々は日本の祖先なる人間であると考へられて、化物などとは思はれて居ない。それで神々の内で別段異様な相をしたものはない。猿田彦命が鼻が高いとか、天鈿目命が顔がをかしかつたといふ位のものである。

又化物の思想を具體的に現はした繪も餘り多くはない。記録に現はれたものも殆ど無く、弘仁年間に藥師寺の僧景戒が著した「日本靈異記」が最も古いものであらう。今昔物

語には往々化物譚が出て居る。日本の化物は後世になる程面白くなつて居るが、是は日本の地理的關係で、化物を想像する餘地がなかつた爲である。其後支那から、道教の妖怪思想が入り、佛教と共に印度思想も入つて来て、日本の化物はこの爲に餘程豊富になつたのである。

例へば印度の三眼の明王は變じて通俗の三眼入道となり、鳥嘴の迦樓羅王は變じてお伽嘶の烏天狗となつた。又日本の小説によく現はれる魔法使が、不思議な藝を演ずるのは、多くは道教の仙術から出たものと思はれる。

日本が化物の貧弱なのに對して、支那に入ると全く異なる。支那はあの通り尨大な國であつて、西に崑崙、雪山の諸峰が際涯なく連り、あの深い山岳の奥には屹度何か怖ろしいものが潜んでゐるに相違ないと考へた。北にはゴビの大沙漠があつて、これにも何か怪物が居るだらうと考へた。彼等は、ゴビの沙漠から来る風を、惡魔の吐息とも考へたのであらう。斯くて支那には昔から化物思想が非常に發達し、中には極めて雄大なものがある。尤も儒教の方では孔子も怪力亂神を語らず、鬼神妖怪を説かなかつたが、道教の方では盛に

之を唱道したのである。

形に現はされたもので、最も古いと思はれるものは山東省の武氏祠の中の浮彫や毛彫のやうな繪で、是は後漢時代のものであるが、其化物は何れも奇々怪々を極めたものである。山海經を見ても極めて荒唐無稽なものが多い。小説では西遊記などにも到る處痛烈なる化物思想が横溢して居る。歴史で見ても最初から出て来る伏羲氏が蛇身人首であつて、神農氏が人身牛首である。恠ういふ風に支那人は太古から化物を想像する力が非常に強かつた。是皆國土の關係による事と思はれる。

更に印度に行くと、印度は殆んど化物の本場である。印度の地形も支那と同じく極めて廣漠たるもので、其千里の藪があるといふ如き、必ずしも無稽の言ではない。天地開闢以來未だ斧鉞の入らざる大森林が到る處に蒼鬱として居る。印度河、恒河の濁流は澎湃として果ても知らず、此偉大なる大自然の内には、何か非常に怖るべきものが潜んで居ると考へさせる。

實際又熱帶國には不思議な動物も居れば、不思議な植物もある。之を少し形を變へると

直ぐ化物になる。印度は實に化物の本場であつて、神聖なる史詩ラーマ・ヤナ等には化物が澤山出て来る。印度教に出て来るものは、何れも不思議千萬なものばかり、三面六臂とか、千手千眼とか、半人半獸、半人半鳥などの類が澤山ある。これ等の化物も皆印度教から來て居る。

印度から西へ行くと、ペルシヤが非常に盛である。古代ペルシヤには例の有名なルスタムの化物退治の神話があり、回教王國には例の有名なアラビアンナイトがある。埃及もさうである。洋々たるナイル河、荒漠たるサハラの沙漠、是等は大に化物思想の發達を促した。埃及の神様には化物が澤山ある。併し之が希臘へ入ると餘程異り、却て日本に似て來る。これ山川風土氣候等、地理的關係の然らしむる所であつて、凡てのものは小じんまりとして居り、随つて化物も皆小規模である。

希臘の神は皆人間で、僅にお化はあるが、怖くないお化である。夫の深刻な印度の化物とは比べものならぬ。例へば、ケンタウルといふ惡神は下半身は馬で、上半身は人間である。又ギカントスは兩脚は蛇で上半身は人間、サチルスは兩脚が羊で、上半が人間である。

る。

凡そ眞の化物といふものは、何處の部分も切り離しても、一種異様な形相で、全體としては渾然一種の纏まつた形を成したものでなければならぬ。然るに希臘の化物の多くは斯の如く糺合せ物である。故に眞の化物と言ふことは出來ないのである。

然らば北歐羅巴の方面はどうかと見遣るに、此方面に就ては私は餘り多く知らぬが、要するに幼稚極まるものであつて、規模が極めて小さいやうである。つまり歐羅巴の化物は、多くは東洋思想の感化を受けたものであるかと思はれる。

以上述べた所を總括して、化物思想はどういふ所に最も多く發達したかと考へて見るに、化物の本場は是非熱帯でなければならぬ事が分る。熱帯地方の自然界は極めて雄大であるから、思想も自然に深刻になるのである。そして熱帯で多神教を信ずる國に於て、最も深刻な化物思想が發達したといふ事が言へる。縱令熱帯でなくとも、多神教國には化物が發達した。

例へば西藏の如き、其喇嘛教は非常に妖怪的な宗教である。斯様にして印度、亞刺比

亞、波斯から、東は日本まで、西は歐羅巴までの化物を總括して見ると、化物の策源地は亞細亞の南方であることが分るのである。尙化物に一の必要條件は、文化の程度と非常に密接の關係を有する事である。化物を想像する事は、理にあらすして情である。理に走ると化物は發達しない。縱令化物が出て開は理性的な乾燥無味なものであつて、情的な餘韻を含んで居ない。随つて少しも面白味が無い。

故に文運が發達して來ると、自物化物は無くなつて來る。文化が發達して來れば、自然何處か漠然として稚氣を帯んで居るやうな面白い化物思想など容れる餘地が無くなつて來るのである。

以上で大體化物の概論を述べたのであるが、之を分類して見ると、どうなるか、之は甚だ六ヶしい問題であつて、見方により各異なる譯である。先づ差當り種類の上からの分類を述べると、

- (一)神佛(正體、權化)、(二)幽靈(生靈、死靈)、(三)化物、(惡戯の爲、復仇の爲)、
- (四)精靈、(五)怪動物

の五となる。

第一の神佛はまともなものもあるが、異形のものも多い。そして神佛は往々種々に變相するから、之を分つて正體、權化の二とすることが出来る。化物的神佛の實例は、印度、支那、埃及方面に極めて多い。釋迦が既にお化けである。卅二相を其儘現はしたら、恐ろしい化物が出来るに違ひなく。

印度教のシヴ神も随分恐ろしい神である。之が權化して千種萬様の變化を試みる。ガネーシャ即ち聖天様は人身象頭で、惡神の魔羅は随分思ひ切つた不可思議な相貌の者ばかりである。

埃及のスフィンクスは獅身人頭であるが、又頭が鳥だの獸だの、色々の化物があるが、皆同工である。此(一)に屬するものは概して神祕的で尊い。

第二の幽靈は、主として人間の靈魂であつて、之を生靈、死靈の二つに分ける。生きながら魂が形を現はすのが生靈で、源氏物語、葵の卷の六條御息所の生靈の如きは即ち夫である。日高川の清姫などは、生きながら蛇になつたといふから、之も此部類に入れても

宜し。

死霊は、死後に魂が異形の姿を現はすもので、例が非常に多い。其現はれ方は皆目的に依つて異なる。其目的は凡そ三つに分つことが出来る。一は怨を報ずる爲で、一番怖し。二は愛恩の爲で、寧ろいぢらしい。三は述懐的である。一の例は數ふるに違がない。二では謡曲の「善知鳥」など、三では「阿漕」、「鶉飼」など其適例である。幽霊は概して、全體の性質が陰氣で、凄いものである。相貌なども人間と大差はない。

第三の化物は、本體が動物で、其目的によつて悪戯の爲と復仇の爲とに分つ。悪戯の方は如何にも無邪氣で、狐、狸の悪戯は何時でも人の笑ひの種となり、如何にも陽氣で滑稽的である。大入道、一目小僧などはそれである。併し復仇の方は鍋島の猫騒動のやうに随分しつこい。

第四の精霊は、本體が自然物である。その最も靈的なるものは、第一の神佛の部に入る。例へば日本國土の魂は大國魂命となつて神になつてゐる如き……。

物に魂があるとの想像は太古からあるので、大は山岳河海より、小は一本の草、一朵の

花にも皆魂ありと想像した。即ち「墨染櫻」の櫻、「三十三間堂」の柳、など其例で、此等は少しも怖くなく、極めて優美なものである。第五の怪動物は、人間の想像で捏造したもので、日本の鶴、希臘のキミィラ及グリフィン等之に屬する。龍、麒麟も此中に入るものと思ふ。天狗は印度では鳥としてあるから、矢張此中に入る。此第五に屬するものは概して面白いものと言ふことが出来る。

以上を概括して其特質を挙げると、神佛は尊いもの、幽霊は凄いもの、化物は可笑なもの、精霊は美しいもの、怪動物は面白いものと言ひ得る。

此等様々の化物思想を具體化するのにどういふ方法を以てして居るかといふに、時により、國によつて各々異なつてゐて、一概に斷定することは出来ない。例へば天狗にして、印度、支那、日本、皆其現はし方が異なつて居る。龍なども、西洋のドラゴンと印度のナーガと、支那の龍とは非常に現し方が違ふ。

併し凡てに共通した手法の方針は、由來化物の形態には、何等か不自然な箇所がある。それを藝術の力で自然に化さうとするのが大體の方針らしい。例へば六臂の観音は元々大

化物である、併し其澤山の手の出し方の工夫によつて、其手の工合が可笑しくなく却つて尊く見える。決して滑稽に見えるやうな下手なことはしない。此處に藝術の偉大な力がある。

此偉大なる力を分解して見ると、一方には非常な誇張と、一方には非常な省略がある。で、これより各論に入つて、化物の表現、即ち形式を論ずる順序であるが、今は其暇がない。若し化物學といふ學問がありとすれば、今まで述べた事は、其序論と見るべきものであつて、茲には只序論だけを述べた事になるのである。

要するに化物の形式は西洋は一體に幼稚である。希臘や埃及が多く人間と動物の糺合せをやつて居ることは前に述べたが、それでは形は巧に出来ても、所謂完全な化物とは言へない。ローマネスク、ゴシック時代になると、餘程進歩して一の纏まつたものが出来て來た。例へば巴里のノートルダムの寺塔の有名な怪物は、糺合物ではなくて立派に纏つた創作になつて居る。但しこれは東洋文化の遠因に據るのである。

ルネッサンス以後は論ずるに足りない。然るに東洋方面、特に印度などでは凡てが渾然

たる立派な創作である。日本では從來餘り發達して居なかつたが、今後發達させようと思へば、餘地は充分ある。

日本は今藝術上の革命期に際して、思想界が非常に興奮して居る。古今東西の思想を綜合して何物か新しい物を作らうとして居る。此機會に際して化物の研究を起し、化物學といふ一科の學問を作り出したならば、定めし面白からうと思ふのである。昔の傳説、様式を離れた新化物の研究を試みるの餘地は屹度あるに相違ない。

狛

犬

日本の神社（佛寺にも）の前に、往々石で造つた獅子の様な動物が一對並んで蹲踞して居るのを見る。時としては又社殿の縁の上、正面の扉の左右に木彫のものが置かれてあり、或は又殿内の神座に充てられた御帳臺の左右にも置かれてある。之が即ち所謂狛犬である。

狛犬の形は一定して居らぬが、多くは獅子の形で、左右少しく相異なつて居る。向つて右が口を開き、左が口を閉じて居るのが多い。又一方の頭に一角があるものもある。總じて右が牡で左が牝であると考へられ、或は右が獅子で左が狛犬であるとも云はれ、古來いろいろの説がある。或は狛犬は狛の國より傳來せる犴で、獅子ではないと云ふ、狛は古代朝鮮の濊狛の事であり、犴は野狗である或は兕であるとも云ふ。兕は青色の野牛に似た獸である。或は角のある方が、豸といふ者で、角の無い方を天祿と云ふ。或は夫は天狗と云ふ者で、獅子でも狛犬でもないと云ふ。天狗とは如何なる狗であるかは説明されて居らぬ。狛犬の一方を獅子とする例は澤山ある。例へば禁祕抄上清涼殿の條には「獅子、狛犬、在帳前南北、左獅子」とあつて、今日でも清涼殿御帳臺の前に一對の動物が置かれてある

が、御帳臺から見て左即ち向つて右が獅子で左が狛犬であると考へられて居る。類聚雜要抄四には「但立獅子形者、帳前南帷之未之表二戸之左右之際、相向天立之左獅子、於色黄、開口右胡麻犬、於色白、不開口、在角」とあり矢張向つて右が獅子で口を開き、左が狛犬で口を閉ぢ、角を有する事になる。併し江家次第第十七に「獅子形立御帳南面左右」とあつて、茲では兩方とも獅子と見て居る。

狛犬が獅子であるといふ説に對しては、古來頗る異説がある。殊に國學者間では極力之を否認し、獅子は西域殊に佛教發祥地の動物であるのに、神社に之を用ふると云ふ法は無といふのである。次に從來國學者間に傳はつた狛犬の傳説の一二を擧げて見やう。

狛犬の傳説に就て古來國學者間に唱道された説は、神代に於て火闌降尊が御弟彦火火出見命の神徳に伏し、その子孫が世々狗人として宮門を衛るに至つたといふ傳説から出たと云ひ、或は神功皇后が、三韓が永く犬の如く服従すべき事を盟ひたるに由り、狛犬即ち高麗犬の形を神前に置いて、後世の證を遺されたのだと云ふ説もある。

又他の一節によれば、古來宮中に於て、屏風や垂簾や帷などが風に煽られぬ爲に鎖子と

して動物の形のものを用ひたので、夫が獅子でも狛犬でも何でも關はぬ筈であるが、便宜上狛犬の形を取つたので、火闌降尊の故事や、神功皇后の傳説と關係があるや否やは不明である。そして神社は即ち宮室に擬したものであるから、終に神社に狛犬が置かれる事になつたと云ふのである。

以上の諸説を綜合して見ると、狛犬の起源が神話から出たにしても、宮中の調度から出たにしても、結局神社に置かれて神社の威嚴を表し、又神社を守護するといふ意義になるのである。神社の稜威を輝し、悪鬼や醜敵に對して守護するのであれば、動物學的に犬では物足りない。これは是非とも、百獸の王たる獅子の形にするより外に名案は無い筈である。名は犬でも、形は獅子である事が至極道理である。斯くして狛犬が獅子の形に作られたので、終に名と形とが混亂して、追々判らなくなり、いや獅子だ、いや犬だ、いや一方が獅子で一方が狛犬だ、いや獅子でも狛犬でもない、など入り亂れて争ふやうになつたので、狛犬が獅子の形に於て用ひられた理由に就ては、我輩別に説がある。それは大要次の如きものである。

吾輩は日本の狛犬は即ち獅子であると考へるのである。そしてそれは恐らく佛教と共に三韓から傳へられたので、火闍降尊や神功皇后の傳説とは全然關係がないと思ふのである。勿論三韓の佛教は、支那符秦の時即ち我が仁徳天皇の御代に高句麗に傳つたのであるから、獅子が佛教に伴つたものとすれば、仁徳天皇以前三韓に獅子が有る筈なく、欽明天皇の御宇、日本に佛教が傳來した以前に、日本に獅子がある筈がないのである。

獅子は既に印度乃至西域に於て、遠い昔から惡魔を退くる靈獸として、左右一對、宮室や佛寺や陵墓等に置かれたので、この風が佛教と共に支那に傳はり、三韓を経て日本に輸入されたので、日本でも神社、宮室、佛寺等に常用されるやうになつたのであらう。

元來獅子なる動物は印度、西方亞細亞、阿弗利加内地の産物で、太古にはバルカン半島の一部にも居つたと考へられて居るが、支那には古くから居なかつた。文獻に據れば、獅子は後漢の代に支那に傳來して居る。夫は章帝の章和元年（景行天皇十七年）に「安息國王獅子を獻す」とあり、翌年月氏王が獅子を獻じた記事がある。同和帝の永元十三年（景行天皇三十一年）にも同じく安息國王が獅子を獻じたとある。順帝の陽嘉二年（成務天皇

三年）には疏勒國王が獅子を獻じて居る。

斯くして獅子は支那に於てもよく知られたのであるが、獅子の字を用ゐたのは獅子の梵語の「シムハ」のシを取て音便に充てたのであると思ふ。又狻猊とも書くのは、必然「シムハ」の音譯に相違ないと思ふ。

支那でこの獅子を石に刻して墓前に立てた實例の最古のものは、山東省嘉祥縣の武氏祠である。これは後漢の桓帝の建和元年（成務天皇十七年）のもので、近頃の所謂「から獅子」とは大に異なつた寫生風のものである。

魏の曹操の築いた銅雀臺の趾から發見された石獅は更に寫生的であるが、これは一對門柱に附着して作られたものゝ様である。爾來六朝以後獅子は宮室陵墓に賞用せらるゝことになつた。獅子を斯く賞用するの風は漢人の創意であるか、或は外來の思想であるか、これは大に考究を要する問題であるが、その實例が、後漢の明帝の時に佛教が支那に渡來してより後の時代に屬する點より考ふれば、恐らく佛教と共に西域の風を傳へたものと考へられる。

印度では、太古より獅子を畏敬し、尊重する風があつたと見えて、佛像の臺に一對の獅子を彫刻したものが澤山ある。佛陀の説法を獅子吼と云ひ、その座を獅子座と云ふに見ても、この事情が窺はれる。

要するに獅子は百獸の王で、總ての猛獸や悪鬼や、あらゆる外敵を撃退するものとして尊重されたのである。西亜地方に於ても、波斯やアツシリアの宮室等には屢々一對の獅子が彫刻せられて居る。或は羽翼を備へたり、或は他の畸形を有するものもあるが、要するに宮室等の守護の意味を有する。埃及のスフィンクスも同じ系統である。小亞細亞の内地下、希臘のミケネに見る獅子門の一對の獅子も畢竟同系のものと見ることが出来る。

即ち支那に於て宮室陵墓等に一對の獅子を置くの風は、西域乃至印度傳來の風と考ふることは不合理ではない。そして其目的が矢張惡靈や邪鬼に對する守護であることは自明である。此風習が支那から三韓に傳はり、三韓から日本に傳來したものと考へるのは、亦當然の推理である。そしてその獅子を高麗の犬と見て「こま犬」と名づけ、高勾麗の舊地濊狛の狛を狛に轉じて「こま」と訓ませたと考へるのは正當である。

我國に於ける狛犬の形状は随分多様であるが、如何なる形が正しいとか、如何なる形が間違つて居るとか云ふことは無い。元來獅子の正物を見たことのない人が、圖案的に獅子の形を作り出すのであるから、作者の技倆次第で勝手な形を捏造して差支ないのである。普通は前肢を揃へて蹲踞して居る姿勢であるが、丈の恐ろしく高いのと、低いのがある。甚だしく後へ反り返つて居ると、前へ屈んで居るのがある。

社寺に屬するもので、國寶に指定されて居るものも可なり多いが、就中面白いものは、奈良東大寺南大門の石の狛犬で、これは宋人陳和卿の作と傳へられて居り、全く支那式で、グツと後へ反つた奇抜なものである。近江の大寶神社の狛犬や、奈良の手向山八幡の狛犬などは、木彫の優秀な作である。概して日本のものは小規模で、三尺を超えるものは稀である。

支那の石獅は後漢以來優秀なものが多く、大作も多い。又往々非常に奇抜なものがある。北京の宮城の前に立つて居るものは獍猛無比の相貌で、高さ一丈位もあらう。南京附近の梁の肅侍中の神道の前のものは、起立して大きな口を開き、長い舌を出し、且つ翼を

備へ、丈七尺に餘る。緬甸ラングーのシユウエダゴン塔の前門のものは煉瓦で積み上げて白堊を塗つたのであるが、特殊の形式で、高さ約二丈五尺ばかりの魁偉なものである。印度には意外にも一對の巨獅の例を見ない。單獨の石獅子ではマドラスの南四十哩のマハバリプラムの石獅が丈一丈に近いもので、實に立派な製作である。小亞細亞内地のアスラントシ（獅子岩の義）にある古墳の浮彫の獅子は相對して立ち上つて居るが、頗る巧妙なる寫生的のもので高さ三丈ばかり、恐らくはこれが世界第一の大獅であらう。若し埃及の大スフィンクスも亦此部類に入るべきものならば、これこそ絶倫の大作である。その突き出した前足の先から臀の端までが百八十尺、地上頭の上までの高さは六十六尺である。

顔の真相

摩訶不思議なる顔

世に人の顔面ほど靈妙不可思議なものはない。世界二十億の人間の面相は一々皆異なつてゐること、猶ほ其の人の心の如くである。しかも其の面相が、各瞬間を以つて微妙なる變化を呈する。如何に驚いても到底驚き切れないものは人の顔面である。

げにや思ひ内にあるものは、色外に現はるとかや。人の面相は其の内心を映寫する鏡であるが、それが實に靈妙であつて、眉目鼻口等の道具の位置の微動、これを形づくる線の働き、顔面の輪廓及び表面の變化、更に其の色澤の暗明、それ等が互に順列及び錯列の方則に従つて無窮の狀貌を生じて無究の表情を示すのである。

我輩の自ら經驗するところによれば、凡そ人の面貌を描くに當つて、常に驚異を感じるものは一點一劃の齎すところの表情の變化である。謹嚴なる容貌が一厘の線の爲めに打ち崩されて奇異となり、高雅なる容貌が一點の眼睛の爲めに破られて卑俗となり、忽ちにして瘳惡となる。一點一劃を改むる毎に轉々として其の表情を變じ、終に究極するところを

知らぬのである。人の心理状態が時々刻々に變化するにつれて、其の面貌に微妙なる變化を來す有様はこれに由つて推知せられるのである。

顔のいろく

我輩は建築家として、古來の所謂面相なるものを信じないと同時に、古來の所謂人相なるものを信じない。即ち、人相によつて人の將來の禍福吉凶を豫知し得ることを信じないが、人の面相が其の人の心理を表示することはこれを確信するのである。尤もこれも程度問題ではあるが、原則として古今東西に共通するものと思ふのである。

我輩の視察するところを以てすれば、人の顔面の原型なるものは餘り多くないが、只だ其の變化が無究である。我輩は今茲に其の詳細を述べ難いが、要するに人の性質の原型に相當する丈の顔の原型があるので、これを構成する要素は、第一に顔の輪廓及び皮膚の狀態、第二に眉目鼻口等の位置及び形狀、殊に大切なるは目の魔力、第三に色澤である。これ等の視察に由つて其の人の大體の性格乃至能力は必ず判知することが出来るのである。

張子房は容貌婦人の如くにして機略縱横と稱せられたが、彼は一見溫柔の如くにして實は俊敏銳利の相が潜在してゐたに違ひない。坂上田村麿は容貌魁偉であつたが婦女兒童も狎れ親んだと云ふが、彼は一見獐猛の如くにして實に慈愛の表情が潜在してゐたのであらう。貧弱にして憔悴せること瘦家の狗の如くにして豪宕磊落、膽斗の如き人もあれば、堂々として威風四邊を拂ふ者にして卑怯未練の臆病漢もある。愚なるが如き賢者、賢明なるが如き痴漢、伶俐らしき低能兒、それ等も實は皆本質相應の特色が潜在してゐるのであるが、總じて顔貌突兀として凡ならざるもの、茫乎として奇なるもの、如きは必ずまた平凡な人ではない。眉目、鼻口、耳等の道具が桁を外れて異常なるもの、顔の輪廓の調子外れに奇怪なるものは必ずまた何等かの特色を備ふる人である。無比の醜郎と云はれた龐士元、龍の如き怪貌と云はれた明の太祖、猿に酷似せりと云はれた豐太閤の如きは其の適例とも云ふべきであらう。眼鼻が正しく、口元が尋常で、輪廓が圓滿なのは要するに平凡な相である。善良ではあるが變哲の無いものである。即ち世俗の所謂美人、好男子と稱するものは、多くは凡庸の徒である。若しも凡庸でなかつたならば、それは只だの美人好男子

ではなくして、何等か異彩を加味した面貌でなければならぬ。

七面鳥も音ならず

人の顔面は各瞬時毎に變化して止まぬものである。睡眠時間以外に於いては、人は間斷なく何等かの刺激によりて何等かの感情を連續的に發するのであるが、それが極めて微妙に顔面の上に現はれ出る。喜怒哀色に現はれずなど云ふことは實際に有り得べからざること、實は何人も七面鳥も音ならぬ顔色の變化を間斷なく示してゐるのであるが、それが極めて輕微な場合には、普通の人には分らぬのである。此の機微を知るには人の顔を寫生して見るのが、一番に良法である。十數分間寫生してゐる間に、普通其の人の顔面は千變萬化する。これは其の人の心理に秘する處の所感が毎瞬に變化するからである。始め取り濟ました顔が、やがて微笑を浮べたり、陰鬱になつたり、險悪性を帯びたり、好情味を加へたり、大悟せるが如く、煩悶あるが如く、希望に輝くと見れば失望に曇つたりする。それは極めて微少な筋肉の働らき、色澤の變化、殊に眼の働らきに由つて現はれるのである。

同じ人の寫眞が十枚は十枚ながら違ふのは此の爲めでもある。

殊に又所謂英雄と稱せらるる程の人物は故らに自分の本心を晦ます爲めに、顔面の表情を任意に捏造するの技巧を有するもので、眞に始末におへぬものである。要するに人の眞正なる面相は到底分らない。吾人が衆人の顔面を見るとき、それは必ず眞正の顔面を見てゐるのではなくして、何等か或る特殊の場合の表情を見てゐるのである。

顔の眞相は寢顔に現はる

人の眞正の面相は其の人が無念無想の境に入つたときに現はれるのであるが、斯くの如き場合は實際に於いては殆ど有り得ない。たとへば睡眠中の面相はこれに近いのである。即ち人の眞正の相貌は其の寢顔に現はれるのである。

我輩は可なり頻繁に汽車旅行をやるが睡つてゐる時の顔を注意して大いに悟る處が屢々ある。一二の例を擧ぐれば、赤兒の寢顔は、必ず何とも云へぬ愛らしさ、純眞さを示すものであるが、これは全く無我無心で一點の邪念が無いからである。小學生程度の小兒は起

きてゐる間は腕白を極め、悪戯を演じ、中には小面憎い悪相を示すものもあるが、彼が一旦騒ぎ疲れてすやくと睡つた時には、其の顔は多くは可愛らしいあどけなさを示すものである。これは彼の本心がなほ純潔で悪徳に汚されてゐないことを示すものである。

會つて乗車中に一肥大漢があつた。隣席の人と愉快さうに笑談してゐたが、彼は満面に愛嬌を湛へ、清姿温容實に好個の紳士と見えた。やがて彼は椅墊クッションにもたれて心地よげに居睡りを始めた。彼の顔面は見る／＼變化した。彼の眦、彼の口元、彼の顔の造作は、最早温良なる紳士ではなくして一個の野卑險悪なる不良漢である。我輩はこれを見て悚然として恐れたのである。恐らくは彼は其の本心既に蠱毒に侵蝕され、華胥に遊んでなほ悪夢に襲はれてゐるのであらう。

昔し迦毘羅衛の王子悉達多が人生觀の解決を思ひ立ち、家を出て修行すべく、或る夜袂かに臥床を抜け出し、戸口の方へ忍び行くとて、數多の侍女等の寢室を通過して、つぶさに彼等のいぎたなき寢姿を見て、今更の如く呆れたのであつた。晝の間は花の如く粧して王子の前に媚を呈した其の美しい姿に引き替へて、或は足首顛倒の醜態を演じ、或は手を

張り足を踊らして、淺ましき姿勢を現はし、或は蕾の唇を開放して涎を漲らし、或は高らかに軒をかく者、其の狼藉は言語道斷である。王子はつく／＼と此の有様を見て興をさまし、彼等が日夕の嬌態艶姿は實は假面を被れる虚偽であり、夜半睡眠中の醜狀は即ち彼等の眞正の本體であることを悟つて、欣然として家を出たのである。

先づ我が錯覺を矯正せよ

遮莫、吾人が人の顔面の眞相を見ることが出来ないのは、其の一半は吾人の眼の不正によることを覺悟しなければならぬ。吾人は常に必ず或る程度の錯覺を以て人の顔を見てゐるのである。此の錯覺は物理的にも起るが、また心理的にも起るのである。惚れた女は美人に見える、痘痕も笑靨に見える。親の慾目と云つて、我が子は一倍縹緞良しに見える。即ち心に何等かの曇りがあれば萬象は正しく映らない。偉人の像を作る場合に、必ず起る問題は、其の人の面貌に對する各方面の人の各種の批評である。作家は虚心平氣で其の人の面貌を有の儘に寫す。家族の人はこれを見て、彼はモット温和な相貌であると主張する。

下僚の人はこれを見て彼はモット厳格な風貌であると主張する。友人はこれを見て、彼はモット濶達な風采であると主張する。これは彼が、家族に對しては常に溫和であり、下僚に對しては厳格であり、友人に對しては濶達であつたからである。然らば偉人の面貌なるものは果して何れであるか、虚心平氣である作家の眼に映じたものが眞に近い筈であるが、さて其の作家が果して虚心平氣であるか、作家が見た偉人は果して無念無想で、其の天真を發露してゐたか、これもよく分らない。結局彼の寝顔が最も正しい顔であるが、寝顔には表情が無いからつまらない、死顔は更に眞正であるが、死顔と生顔は相恰が違ふとは、菅原傳授の松王丸を待たずして自明である。

要するに吾人は、人の面貌の眞偽を見ることは出来ないが、先づ己の眼を正しくすることが先決問題である。吾人の眼の物理的錯覺は深く問ふところではないが、大切なのは心理的錯覺の矯正である。此の錯覺を矯正することが出来ない間は他人の面貌を批評する資格は無い。

朝顔目あきの松

はしがき

「追うて行く、名に高き、海道一の大井川、篠を亂して降る雨に、打ち交り鳴るはたゝがみ、みなぎり落つる水音は、物凄くもまたすさまじき」

嘈々と沓え渡る大絃の妙音につれて朗々と語り出す動塵の美聲、これ朝顔日記大井川の段の名曲である。朝顔日記は、宿屋の段から大井川の段に至る間を生命とし、其の場面は、すなはち東海道の島田の宿である。島田の宿は大井川によつて名高く、大井川は朝顔日記によつて名高いのである。

予は當夏島田町の蘭契會に講師として招かれた。島田町から大井川、大井川から朝顔を聯想する時一種の情緒が綿々として盡きないので、欣然招きに應じて島田町に出かけた。予は町の名家にして長老たる舊本陣の置鹽藤四郎君とは舊知の間であるが、君はかねてより大井川について深き研究調査を進めてをられ、予のために極めて詳細に説明を與へられた。予は始めて此の海道一の大河を見、朝顔の古跡を訪ひ、感興つくるところを知らぬの

で、こゝに試に予の見たところと、置鹽君より聞き得たところを綜合して此の一小話を綴つて見たのである。

島田町

島田町は大井川を挟んで金谷町と相對する東海道の一驛であるが、町の廣表は民家の群集する部分に於いて東西約三十町、南北五六町に出入し、人口は二萬を超へ、市街殷盛と云ふにあらざるも相當に賑はひ、今や好個の都市の體裁を備へてゐる。

島田町が東海道屈指の大都にまで發展した原因については予は未だ的確なることを知らないが、此の地が大井川の左岸に接し、江戸時代を通じて旅客が蓮臺によつて川を徒涉せざるべからざる制度であり、しばし川止めがあつた爲めに、自然多數の旅客がこゝに滞在するによつて土地は自ら繁榮して遂にこゝに發展の基礎が築かれ、明治四年以來蓮臺徒涉の制は廢せられて船渡しとなり、次いで架橋が完成されて今日に至つても、大井川の上流の大森林から伐採される多量の木材が大井川によつて島田町に集中せられるやうにな

り、或はこれを製材し、或はパルプを作り、或は乾溜して藥液を作る等の事業が起されたことが、發展の第一の原因であると考へられる。

地形も山遠く沃野廣く、大井川の分流によつて縦横に灌溉され、地味も豊饒であり、氣候は溫暖であり、總てが土地の發展に有利である。均しく大井川に接するも、對岸の金谷町は、三方約五六百尺の高さの岡によつて包まれ、土地が狹隘で地の利が薄い爲めに島田町に比して遙かに低度の發達で、人口一萬に達して居らぬと云ふ。

大井川と川越

大井川は信駿の界に聳ゆる赤石山脈の奥に發源し、嶮嶮を突いて急湍矢の如く奔下し、島田町の東南約四里にして駿河灣に注ぐので、其の長さは約三五六里に過ぎぬが、水勢の激しい爲めに幅は比較的に廣い。今度新に架けられた鐵橋は長さ五百五十間で、日本第一の長鐵橋だ、と稱せられてゐると聞くが、眞偽は予はよく知らない。兎に角物凄い川で、約十町に近い河床の上に幾條の流れが離合集散つし、互に角逐して奔るので、其の流

れが豪雨毎に多少變轉して行くことは此の種の川に通有の現象である。

此の大井川は、古へ如何にして越したものがよく知らぬが、恐らくは渡船であつたらうと思ふ。それが江戸時代徳川氏の世となつて渡船が嚴禁され、蓮臺徒涉の制が勵行されることとなつたのは、勿論幕府が防禦の第一線として此の川を選んだ爲めである。そして島田町に陣屋を置いて往來の旅客を嚴重に監視し、一定の場所以外の渡川を禁じ、犯すものは嚴罰に處せられた。なほ川の水量は毎日測定してこれを幕府に報告し、一定の水量を越えた時は直ちに川止めを命じたのであつたといふ。川越しの人夫は普通六百人程で、賃錢の如きも幕府で規定してゐたが、實際は勵行されてをらなかつたやうである。

川止めは雨季には頻繁にあつた。置鹽氏の談によれば最も長い時は二十九日間の川止めがあつたといふ。かくて數千の溢れた旅客の難儀は一方ならず、往々滞在費が盡きて所持品を賣りつくし、それでもなほ足らずして極端なる悲劇をさへ演ずるものもあつたのである。しかし島田町はこれが爲めに金廻りがよいので、町民は窃かに大井川の増水を祈つてゐたかも知れぬ。

島田町の古代の事情はよく知らぬが、政治的所屬は足利氏末に今川氏に屬し、それから武田氏、織田氏を経て徳川氏に屬するに及んで、こゝに代官所すなはち幕府の出張所が置かれた。其の後代官所が駿府すなはち今の静岡に移され、島田には陣屋を置いて代官所の事務を取扱つてゐた。すなはち島田は連綿として徳川氏の直轄地たる天領であつた。島田が重要視されたことはこれによつても知られるのである。

朝顔目あきの松

予は一日蘭契會の幹部の諸氏の案内により、同じく講師として來會された服部宇之吉博士と共に島田町附近一帯を見學したが、就中予の最も興味を感じたのは、すなはち大井川の畔なる朝顔目あきの松であつた。

一路西に向つて古への東海道を走ること若干程にして島田町の民家は盡き、道の兩側には老松轟々として聳え立つ。道は大井川の岸に當つて將に窮らんとするところに、左手の標柱に朝顔目あきの松と記されてゐる。近く望めば鬱々たる巨松翠濃まやかに群樹を睥睨

して君臨してゐる。予等は自動車を降りて松の方へと進まんとする時、豪雨篠を亂して降りしきる。生憎や打ち交り鳴るはずのはたゞ神は如何にかしけん聲を聞かせぬのが残念である。予はひた濡れながら、朝顔の戯曲を聯想しつゝ百歩餘りゆいて巨松の下に雨宿りしつゝ、さてつくづくと打見れば實にも稀有の靈樹である。直徑目通り五六尺、高さは百幾十尺か咄嗟には見當もつかぬ。しかも打ち交はる千朶の枝、打ち重なる萬蓋の葉、よく繁つて老衰の佛はない。恐らくは少くも鎌倉時代の始めに芽生したのであらう。曾つて神木として尊崇されたらしく、今も幹に繞らされたしめ縄の痕跡が遺つてゐる。

松の傍に一基の碑があり、それに長文の銘が刻されてゐるのであるが、餘りの大雨に終にこれを讀むことが出来なかつた。聞けば此のところを戯曲にはゆる朝顔が駒澤を追うて一場の悲劇を演じた地點に比定し、此の老樹を目あきの松と命名した次第を刻したのであるといふ。

當初此の碑を立てる時或る方面から、架空の小説の捏造の傳記によつて、事々しく碑を立てるが如きは實に馬鹿氣た沙汰であるとして反對されたが、多數の好事者の主張によつ

て終に建設を見るに至つたと云ふが、予は此の種の企てには大賛成である。賛成の理由は後段に改めて述べるのである。

宿屋と本陣

朝顔日記にはゆる徳右衛門の宿屋は井筒屋といつて元來町の中にあつたが、今は既に町外れに移轉し、屋號も代り、徳右衛門の子孫も絶えたものか誰も知る者がなといふが其の筈であらう。

大井川の川越しの関係上、島田町には比較的多數の宿屋があつたやうである。本陣も三戸あつたので、其の一つはすなはち置鹽家である。本陣は江戸時代に於いて大名の宿泊する旅館であり、大名及び公卿以外の階級は絶対に利用することが出来なかつた。東海道筋では、箱根と濱松に六戸、小田原に四戸、其の他各驛に三戸以下一戸を設けたのであり、島田と金谷は小驛であるが、大井川の関係で各三戸を有してゐたのでありといふ。

こゝに面白いのは置鹽家に傳はる大名帳といふ宿帳で、慶長以來當家が本陣を命ぜられ

ざる以前からのもので、其の大部分は東京帝大に寄贈されたといふ。就中元祿十三年の宿帳に吉良上野介の名があり、引繼いで淺野内匠頭の名が現はれて来るなどの興味ある場面が展開されてゐると聞き及ぶ。

置鹽家に傳はる本陣のプランは洵に貴重なる建築史の資料である。予はかねてより本陣の建築を調査して見度いと心懸けてゐたが、其のプランの完全なものは容易に見られず、既往に於いて石部驛の本陣のものが、唯一の資料であり、中山道では追分驛の本陣に書院が現存してゐるのが唯一の實例であつたが、今また島田驛のものを得て限りなく喜ばしい。今兩プランを比較して見るに、大體に於いて同工異曲である。室の配置等の詳細はこゝに説明を省くが、これによつて當時の大名旅行振りが手に取るが如くに分るのである。置鹽氏の談によれば、大名は別に宿賃を仕拂はぬが、手當すなはち今の茶代として少からぬ額を投じたもので、本陣の生計はこれによつて裕に立ち行つたといふ。大名は多數の隨從者を引率したものであるが、本陣には僅に少數の近侍の者が隨宿し、其の他の家來共は普通の宿屋に分宿したのであつた。

史蹟名勝標示

島田町には特筆すべき重要な史蹟名勝は無い。大井川に關聯して芭蕉の句が碑に刻されたものが二つある。句は

さみだれの雲吹き落せ大井川

馬方はしらじしぐれの大井川

といふので、何れも眞筆を刻したのである。前者は大井川橋畔の大井川公園にあり、後者は古への川越しの地點附近にある。

次に朝顔目あきの松は、既述の如き小説的捏造の空談を史實の如くに取扱つたもので、甚だ非學問的であると非難する人もあるといふが、それは如何にも狭い量見である。今日いやしくも日本人で朝顔日記を知らぬ者は恐らくは一人も無いであらう。文藝の威力の偉大なることは實に恐るべきもので、大文豪の力は大政治家、大科學者の力に比して毫も遜色が無いのである。それは兎も角、朝顔の小説によつて目あきの松を作つたのは、これを

史實として曲解したのではなくして、あくまで小説、戯曲として取扱つてゐるので、それが世人に多大なる感興と共に教訓を與へこそすれ、何の害毒も不都合も與へぬのである。

話は多少脱線するが、何れの國民にもある神話や傳説は殆ど總て架空の思想や捏造であるが、時と共に一種の神祕的尊嚴や、感興的憧憬を以て彩られ、つひに深く國民一般の腦裡に印せられて永く失はれぬのである。これが爲めに或は碑を立て、或は祠を造り、或は堂を建て、或は一大伽藍をさへ建立するに至るので、もとより甚だ結構なことである。

予は支那でしばしば傳説の地に碑を立てて、これを宣傳する實例を見た。例へば河南省衛輝府附近に「孔子擊磬之處」があり、同洛陽縣に「管鮑分錢之處」があり、陝西省漢中府に「孔明造木牛流馬之處」があり、更に別種のものでは河北省順德府の北に「豫讓橋」などがあり、其の他類例が甚だ多い。旅客はこれによつて既往を追懷して多大の感興を催すのである。

日本では何故かかゝることに甚だ冷淡である。しかし既に河内の櫻井に「楠公父子訣別之處」の碑が立てられた以上、史實傳説の詮議は別として、此の種の試みを盛んに行つて

見ては如何。例へば東海道筋ならば、鴨立澤に「西行詠歌之處」、足柄山に「新羅三郎吹笙之處」、池田の宿に「俊基朝臣何々之處」といふが如く、到る處に碑を立て、見たら如何であらう。予はこれ必ず百利あつて一害なきものと思ふのである。朝顔目あきの松の碑も此の意味に於いて禮讚するのである。

小話二十篇

支那の教科書

私は昨年朝鮮旅行の序に、鴨綠江を越へて安東縣に入り、久方振りに支那の雰圍氣に觸れて押へ切れぬ感興を催した。その時私は現代に於ける支那の普通教育の内容を知り度いと考がへ、その一端の参考にもと思つて一書肆に立ち寄り、尋常小學校の教科書の殆んど全部を買つて見た。そしてその第一卷から順々に終まで目を通して見て或は成程と感心し、或は窃かに眉をひそめ、或は會心の微笑を催し、或は呆然として開いた口が塞がらなかつた。色々面白いことを發見した内で茲に科學に關係ある一節を御紹介致すのである。

◇

科學と云つても尋常小學校の教科書であるから平易中の平易なもので、取り立てゝ言ふ程のものはないが、只一つ面白いと思つたのは「鯨」と題した一課であつた。

頁の下半部に鯨の圖を掲げ、上半部にその説明があるが、劈頭に「海中大魚有り、その名を鯨と曰ふ」と立派な古典的な文章で書き出したものである。總じて文體は古典的で、用字文章共によく洗練され、申し分のない名文である。日本第一流の漢文學者と雖も恐らくは之に及ぶまい。流石に本場は本場であると感心した。

夫れから鯨の記事に移り簡明平易の裡に巧みにその要領を述べ終り、最後に鯨が胎生哺乳であることを説いて、「故に魚の名有てその實無し」と結んである。

◇

諸君、如何にも面白ではないか。「海中大魚有り」と書き出し、「魚の名有てその實無し」と結んだ處は天晴れ構想ではないか。日本の小學校の教科書なら第一に、鯨は哺乳獸の一種で、と書き出すに相違ない。併し夫れでは餘りに理性的で露骨である、理性の發達して居らぬ兒童には餘りに乾燥ではあるまいか。兒童は鯨の挿圖と魚に従ふ字の形とを見て先づ魚であると直覺する、そこで「これは鯨と云ふ大魚だ」と話し出し、追いかゝると其説明を進め、終りにその胎生哺乳であることを説いて、名は魚であるが實は魚でない」と教

へる所に妙味がある。

支那の文章には此の種の構想が甚だ多い、蘇東坡の范增論も夫である。始めに范増を散々にけなして置いて、最後に「嗚呼増も亦た人傑なる哉」と激賞して結尾とした處は、慣用手段とは云へ、實に面白い。總じて支那人の論法は決して一本調子でない。一つの理論を眞向に振り翳して、ヒタ押しに押すのではない。先づ悠然として論線に入り、進むに従て或は緩に或は急に、忽にして左に曲り、忽にして右に折れ、突如として跳躍し、遽然として逆進する。そして結局不得要領に終ることが多い。支那人に對するには先づこの支那一流の兵法を承知して置く必要がある。

◇

話は大に脱線したが、彼の小學校教科書の中に別に又面白い現象を發見した。夫は民政、自由、平等、外交等の課目を掲げてしきりに政治外交や思想問題を説いて居ることである。中華民國の興つた由來や、支那の外交が振はずして常に列強から壓迫されて居ることを、例の美文で巧妙に書き立て、國民を激勵して居る。成る程支那人は兒童の時から斯

かる方面の教訓を受けて居るから、言論や外交に練達する筈である。しかも教科書全體を通じて觀れば、その中に科學的の課目が比較的少なく抽象的のものが割合に多い。中學以上の教科書の詳細はよく知らぬが大體日本を標準として居る。要するに支那に科學的知識の普及せらるゝのは何時の事か、一寸見當がつかぬ。

尤も以上は安東縣の教科書の話である。支那の各地方には夫々異なつた教科書があり、内容も亦た互に相異なつて居るのであるが、一の参考とするに足りるであらう。

社寺の縁起

昔し或る處に珍書蒐集癖の人があつて、藤原佐理が書いた徒然草を珍藏して居た。友人之を聞いてその人に向ひ、徒然草は南北朝時代に兼好法師が作つたものである。藤原佐理は平安朝初期の人であるから、徒然草を書く筈は無いと忠告した。處がその人は一向平氣で、書く筈の無い人が書いたのだから、これ程珍らしい書は無いではないかと言つた。

◇
これは昔の笑話であるが、今も之に似た笑話の絶へないのは面白い。余が十數年前播州路を探險した時或る一小寺を訪問した、寺僧は大に喜んで歡待して呉れた上、寺の縁起を專細かく説明し、昔神功皇后が三韓征伐からお歸りの途中こゝにお立寄になり、記念の爲に一寺を創建せられたのが即ち當山であるとして頗る得意の體であつた。余は可笑しさをこ

らへて、「日本に佛教の渡來したのは欽明天皇の御宇である、然るに神功皇后は夫より三百五十年も前の御方である。當山の縁起も随分振つたものである」と言つた所が、寺僧は一向平氣な顔で「佛教渡來の傳記などはドーでも宜しい、當山が神功皇后の御創立であることは眞實正銘疑の無い處である」と答へたので余も二の句が繼げずに閉口したが、如何様これだけの信念がなければ安心してこの寺の住僧として居られぬ譯であると感心した。

◇

今一つ類似の話は信濃の善光寺の由緒である。寺僧に従へば、印度に於て釋迦在世の時毘舍離國の月蓋長者が、閻浮檀金を以て阿彌陀三尊を作つたのが一千年を経て支那に傳はり、更に三百年を経て百濟に傳り、夫から又百年にして欽明天皇の御宇に日本に傳はつた。始め蘇我の稻目が向原寺を建て之を奉安したが轉々して推古天皇の十年四月信濃の人若麻績東人善光が之を信濃の麻績に移し、後皇極天皇元年に今の地に遷し伽藍を造營した。善光寺伽藍の濫觴は即ち之であると。

◇

若しこの由緒の通りであるとすれば、欽明天皇の御宇佛教渡來は西紀五五二年で、釋迦時代に作つたと云ふ三尊佛は夫よりも千四百年前であると云ふから西紀前八百四十八年になる。然るに最近の學說に従へば釋迦の年代は西紀前五六五——四八六であるから傳説と正史の間に三百年からの差が生ずる、況んや印度で佛像を作り始めたのは遅く西紀第四世紀の始からであると考定されて居る。余は寺の縁起は縁起として面白いもので、之を正面から史實によつて論ずるのは瞽家の骨頂であると考へて居るから、善光寺の縁起に就ても別に理屈は言はないが、随分矛盾が多いのである。總じて社寺の縁起と云ふものは、荒唐無稽なものが多く、一々之を理屈攻めにしたら、殆んど際限が無いことになる。併し荒唐無稽な傳説を生み出した動機、それが多年尊信され來つた歴史、この傳説が如何なる程度に人を感化し善導したかを考へれば、荒唐無稽必ずしも一蹴するに及ばぬのである。却て正確眞實にして、しかも世道人心に益なく、社會及國家の爲に毫も利する所なきものが随分あると思ふ。經世に志ある人は大に考へなければならぬ。

鶯張り

十數年前の話であるが、余は或る富豪の依頼に由り彼の爲に宮殿風の建築を考案した。その材料は殆んど全部木曾檜材であり、随分鄭重な普請であつた。これを傳へ聞いた一棟梁、主人なる富豪の許に一書を奉つて珍無類なる建議を試みた。その内容はザツと次の如きものであつた。

凡そ古來宮殿の床はすべて板張りであるが、その板は鶯張りにするを正格とする。京都の御所や有名なる佛寺にその例が澤山ある。然るにこの鶯張りの法は匠家極秘の傳があつて、之を知るものは殆ど無い。幸に小子の家には祖先以來この秘法が傳はつて居る。願はくば小子に命じて貴邸の床に鶯張りを實施せしめ給へ、鶯の鳴く音そのまゝの音を出して

御覽に入るべし。

主人はこの一書を余に示して意見を諮ふた。余は一讀して將に噴飯せんとしたが、主人に請はるゝまゝに鶯張りの講釋一番、聞き入つた主人其他の人々も成る程と合點された。所謂鶯張りとは抑何であるか、其因縁は實は次の如きものである。

誰でも京都の巨刹殊に知恩院の方丈の廊下を踏んだ人は、その床板を足で踏むに應じて一種の嚙啞たる音樂的美響を發するのを聽くであらう。踏む力の加減で、華經華經と鳴り、さながら梅に轉る鶯の聲に似て居るので、案内の小坊主は聲朗かに『床板は鶯張り』と説明する。日本各地方の無数の神社佛殿等にこの現象は洵に稀有であるに係らず、獨り京都地方にのみ類例が多いのは何故であらう、或は京都地方には特殊の技術を有する工匠があつて、何等か祕密の手法を用ひたのであらうと想像するのも無理ではない。併し事實は決して爾く神祕的なものではない。

凡そ高級なる神社佛殿の床板は原則として檜材を用ゐるので、夫も成るべく良質の、幅

も厚さも相當に大きなのを選ぶのである。この板を充分鄭重に仕上げて密着せしめ、隠釘を以て根太に取付ける。然るに長い年月の後には、板も釘も若干瘦せるので、その間に間隙を生じ、人が之を踏む毎に動搖し板と板、板と釘との肌が摩擦して音響を起す。この音響が、間隙の程度と材の性質とに由て偶然に清朗篤の轉るが如くに聞こえるのである。若し材質が粗であつたり、間隙が不正であればその音響は騒濁で不快である。即ち驚張りなるものは全く偶然の結果であつて、始めから計畫して出来る譯のものではない。唯精良なる材料を以て周到なる工事を施したならば、他年或は驚張りの現象を生ずべき可能性はある。しかし又餘りに嚴密なる工事を施せば却て音響は生じない。餘りに粗漫なる工事であれば、ガタ／＼騒音を發するから驚張りでなくして蛙張りとなるのである。

世には偶然に想ひもよらぬ奇果を得ることが少なくない。併し奇果を得る丈けの素因は初めから作られて居るのである。この偶然の結果を、始めから故らに畫策したものと誤解して、それに何等かの解釋を試みようとする類例は、吾人の日常生活にも社會生活にも常に經驗する處である。吾人は漫りに彼の驚張りを進言した大工を嗤ふ譯には行かない。

番匠氣質

昔桓武天皇が平安京を經營された時、大内裡の八省院の建築には格別叡慮を煩はされ、親しく工事を監督せられた。或時天皇は八省院の正門なる應天門の工事を臨檢せられ、つく／＼と其恰好を御覽になつて、係りの番匠を召され、この門の形は洵に美しいが、只だ丈けが一尺高過ぎる、早速變改致せとの勅詔が下された。番匠は謹んで拜承したが、さて自ら最善と信じた形を變改するに忍びない。思案に餘つて遂に五寸丈け低くして工を竣つたのであつた。

工事竣成を告げた時天皇は親しく檢分の爲に行幸せられ、空に聳ゆる應天門の雄姿を熱心に御覽になり、彼の番匠を御呼びになつて、朕曩きに高さを一尺縮めよと命じたるが、今にして思へば過てり、一尺五寸縮むべかりし、なほ五寸高過ぎしものと後悔の御氣色

なり。番匠は之を聽いて恐懼措く所を知らず、地に拜伏して有の儘に白状した。天皇は歎息し給ひつゝ、今は詮方なし、見よ後に必ず異變あらんと仰せられたが、果せる哉幾年の後烈風の爲に應天門は壊倒したのである。

◇
これは昔の傳説であるが、之と同工異曲の傳説が、百年前の近代に語り傳へられて居るのは面白い。夫は江戸下谷の廣徳寺の門の話である。この門を造つた番匠の名は忘れたが、當時有數の名工で、丹精を抽んで、造り上げたので、天晴れの手際と賞讃されるかと思ひの外、見る程の人は皆一尺低過ぎたと貶した。番匠は非常に落膽して、毎朝その門の前に往つて『一尺低過ぎたか』と歎息しつゝ終日門を眺め暮らして家に歸り、夜も碌々安眠しない。斯くの如きこと數十日に及んで、彼は心身の疲勞の爲に終に死んだのである。

その後間もなく安政の大地震があつて、江戸の民家は勿論、堂塔伽藍も多く壊倒又は破損をしたが獨り廣徳寺の門は少しの異常もなかつたので、彼の番匠の隠れたる技倆は茲に始めて顯はれ、始めに一尺低過ぎたと笑つた人達は、深く自分等の不明を耻ぢたといふ事

である。

◇
然るに茲に更に復た之と同工異曲の實話があるのは不思議である。夫は余の知人の實談であるから虚偽は無い。たしか明治の初年である。京都の某番匠が某寺の唐門を造つた所が、仲間の工匠等が之を評して『洵に申分の無い出来栄だが惜しいことに軒の出が一尺淺過ぎた』と言つた。番匠は之を氣に病んで毎日唐門を見に往つて、『軒の出が一尺淺過ぎたか』と言ひ暮して居たが、終に之が爲に神經衰弱に陥つて死んだと言ふことである。

◇
建築の形の美は實際極めて微妙なものであるが、高低五寸や一尺の差で烈風や烈震に耐へると否との結果を生ずる程きわどい物ではない。以上の話は勿論建築の微妙と名匠の責任觀念を宣傳する爲の傳説であらうが、唐門の話だけは確實である。今時の人が聞いたら、定めて馬鹿な話だと笑ふであらうが、昔の番匠氣質は多くは斯くの如きもので、純眞誠實の心は誠に美しいものであつた。

増上寺大殿

桓武天皇と應天門の話とその儘再現した様な實話の一つある。それは予自身に關することであるから、之を吹聴することは如何にも烏滸がましい次第であるが、姑らく諸君の寛恕を得たい。

夫は芝の増上寺の大殿再建の話である。予は寺から工事設計監督の依頼を受けたので、早速京都から佐々木岩次郎君を招聘して一切の技術上の事を委任した。佐々木君は京都の巨匠木子棟齋氏の高弟で夙に出藍の譽高く、今日に於ては日本唯一の日本建築の老大家であり、現に帝室技藝員である。佐々木君は周到嚴密なる考慮と老練圓熟せる技術を以て、苦心慘愴の結果、數ヶ月を費して大殿の設計圖を描き了り、寺の役員及關係者等一同の前

に提出して批判を求めた。

流石に佐々木君の考案である。堂々たる巨殿の雄姿は見るからに爽快であり、その一線一條一點一劃の末に至るまで寸分の申し分もない。一同はたゞ陶然として酔へるが如くであつたが、予は熟視數刻の後『洵に結構であるが、丈が少し高過ぎはせぬか、一尺低くしたら如何であらう』と切り出した。佐々木君は『いや自分は高過ぎるとは思はぬ』と主張する。高過ぎる、いや高過ぎぬの押問答に果しがないので、並居る人々は呆れ顔、中にも寺の執事は眉をひそめて『百尺からの大殿の高さに僅か一尺位の高低を何もそんなに八釜敷曰ふに及ばぬではないか』と言へば、誰やらが横槍を入れて『いつそ兩方から讓歩して五寸低くしたらどうだ』と仲裁を試みた。斯くてなほ數次の押問答の末、終に原案より高さ五寸丈け低くすることに決定されたが、佐々木君は定めて不本意であつたと思ふ。

曩にも述べた通り、建築の形は實に微妙なもので、百尺に對して一尺は随分荒い療治で

ある。柱などでは一分を争ひ、板などでは一厘を争ふのである。この分厘の差で美醜が別れるのは、猶ほ人の眼鼻の形が分厘の差でその表情を異にするがごときものである。

◆
斯くて増上寺の大殿は十年の星霜を閲して漸く竣成に近づいた時、大正十二年の大震に會した。巨山の如き大殿は物凄い吁鳴を立てて動揺したが、精査の結果毛筋程の損傷も發見されなかつた。半葺きかけ屋根の瓦も、一枚もズツたものさへ無かつた。併しこれは高さを五寸低くした結果ではない。全く佐々木君の周到なる注意によつて、繼手や仕口が特別に入念に施工され、構造が最も完全に出来て居たからである。

◆
由來完全に造られた殿堂は、アレ位の地震でビクともするもので無い。あの地震で潰倒又は大破した建築は、地盤の不良、構造の脆弱、老朽、その他等か缺陷のあつたものでなければならぬ。

血 天 井

京都の三十三間堂の眞向に天台宗の養源院といふ相當に大きい寺がある。と云つても分らぬかも知れぬが、桃山の血天井と云へば、京都名所の一として大抵の人は知つて居る筈である。夫は伽藍の殿堂の天井板に點々暗褐色の人の手や足の痕が見へるので、それは桃山落城の際勇士共が城を枕に自殺した時の血痕で、その板を當時の天井に記念として使用したのであると云ふ。

◆
桃山城即ち伏見城は豊臣秀吉が文祿三年に造營したもので、慶長三年秀吉薨去の後秀頼は大坂城に移住し、徳川家康が桃山城を保管して居た。慶長五年關ヶ原の役の發端、家康が上杉景勝を押へる爲に東下した機に乗じ、浮田秀家、島津義弘が桃山城を強襲したの

で、留守番の鳥居元忠が極力防戦したが、力盡きて手下の將士と共に自殺したことは有名な話であるが、その時血痕に染つた床板がドーして養源院の天井になつたか、一寸解し難い経緯である。

◇ 歴史のことは自分は門外漢であるが、養源院は浅井長政と縁故の深い寺だと聞いた。長政の長女は即ち淀君で、三女は徳川秀忠の夫人である。こんな關係から、元和六年桃山城を取り毀つた時、殉難の勇士を記念する爲に秀忠の夫人が斯く取り斗らつたと解するかも知れぬが、神聖なる伽藍の天井に血痕淋漓たる古板を用ふるとは受け取れぬ話である。自分の觀る處では、あの天井の手や足の痕は血ではない。

◇ 自分の経験によれば、凡そ良質の檜材をけずり上げて、夫に脂手を觸れると、必ず程經て手の痕が現はれる、始めは少しも分らぬのであるが、一年二年と經つ中に段々濃く現はれて来る。終には夫が暗褐色となつて殆んど血痕の様になるのである。しかもそれが殆ん

ど如何なる方法を以てするも拭ひ去ることが不可能である。

◇ 伊勢の大神宮その他高級の社殿はすべて檜造りであるが、その用材を仕上げた後は、之を取扱ふ際に大工は必ず白い手袋をはめるのである。これは汚れた手を御用材に觸れるのは畏多いと云ふ意味ばかりでなく、手の脂が用材に着くと後に必ず汚點を現はすからである。何故に檜材にこの現象が著しく起るか、檜以外に於て如何なる程度にこの現象が起るかはまだよく知らない。

以上の経験から推察するに、養源院の天井に點々として手や足の痕の見へるのは、必定造管の際大工や人夫が脂手で用材を取扱ひ、脂足で踏んだ爲にその痕が現はれたのであらう。なほ注意して見ると、手の痕は天井斗りではなく、柱や羽目板にも隨所に見へるのである。

◇ 只だ分らぬのは、京都の無数の神社佛寺に、之に類する實例を聞かぬことであるが、な

は詮議して見たならば、恐らくは他にも多少の類例を發見するのであらふ。去るにしても養源院のみが特に著しく目立つのは奇蹟であるが、これ聽て桃山の血天井の傳説を産んだ所以であらう。

三十二相

佛説に従へば釋迦の軀體に三十二相と云ふものがあるが、若し釋迦が眞にこれを具備して居たとすれば、夫れは途方もない畸形兒である。否到底之を具備し得ないのである。その具備し得ざるものを具備して居る處が釋迦の釋迦たる所以かも知れぬ。



- 先づ三十二相なるものを列擧して見ると、(一) 足下平滿相、(二) 足下千幅輪相、(三) 手足柔輭相、(四) 手足長指相、(五) 手足指輓相、(六) 足痕廣平相、(七) 足趺高滿相、(八) 伊泥延臍相、(九) 正立靡膝相、(一〇) 馬王隱藏相、(一一) 一孔一毛相、(一二) 衆毛上向相、(一三) 細薄身皮相、(一四) 眞妙金色相、(一五) 七處平滿相、(一六) 肩頂圓滿相、(一七) 腋下平滿相、(一八) 大人直身相、(一九) 身相端嚴相、(二〇) 身體廣長

相、(二二) 上身獅子相、(二三) 面各丈向相、(二四) 四十齒齊相、(二五) 四牙鮮白相、(二六) 常得上味相、(二七) 廣長大舌相、(二八) 弘雅梵聲相、(二九) 牛王眼睫相、(三〇) 紺青眼睛相、(三一) 獅子王頰相、(三二) 眉間白毫相、(三三) 頂上肉髻相とある。

これで見ると随分不思議な形相で、就中第五相では手足の指に鷲の如き水掻きがあり、第十四相では全身が金色に光り、第二十三相では齒が四十本あり、第二十六相では舌の大きさが面を掩ふ程であり、第三十二相では頭の頂に肉瘤があるなど、到底眞人間ではない。併しこれ等の畸形はなほ有り得べしとするも、絶対に有り得ないのは第九相と第二十相との共存である。第九相では手を垂るれば膝を掩ふと云ひ、第二十相では左右の手を廣げたま時指端から指端までの長さが頭の頂から足の裏までの高さに均しいと云ふのである。この二ツを別に考へれば別に不思議は無いが、同時に考へると到底不可能となるのである。

若し兩相が同時に成立するとすれば、或は殆んど上腿の無い人とならなければならぬ。若し肩幅が充分であれば膝が腿の付け根の處になければならず、脚が普通であれば肩幅が無くなることは、試にこの約束に従て釋迦の像を畫いて見れば直ちに分るのである。

尤も釋迦は必ずしも常に三十二相の總てを示したのではなく、隨時その中の若干相を現はしたので、現に三十二相を完全に具備した佛像はその實例を見ないと説明するかも知れぬが、それは餘りに曲解である。

◇
由來この三十二相なるものは何時如何にして拵らへられたか、予は未だ詳なることを知らぬのであるが、恐らくは一半は上古佛陀の姿を石に刻し又は壁に畫いた時、製作の都合で自然輪廓が非寫實的になり一半は佛陀の超人間的尊容を現はさんが爲に故らに不自然な形相を作つたのを、後世造像の型典にしたのであると思ふ。

然るに何を勘違ひしたのか、古今日本では三十二相具足と云へば絶世の理想的美人の條件であると思つて居るかの如くであるが、冗談ではない、陰部は馬の如しとあるではないか。若し眞に三十二相完備の人間が現はれたならば、之を見た人は卒倒せずには居られない。予は試にその姿を畫いて見ようと努力したのであるが、何分前記の第九相と第二十相の矛盾を適當に處理することが出来ないで、終に形が纏まらなかつたのである。

左甚五郎

慶長寛永の間に造られた神社佛寺宮殿等の建築若しくは建築彫刻に、左甚五郎の作と稱するものが可なり澤山ある。甚五郎なる建築家又は建築彫刻家は果して實在であるや否や、頗る疑問とされて居るが、今の處これを否定すべき確證もなく、又肯定すべき證據も無い様である。但し「歌俳百人撰」によれば、彼は播州明石に生れ、後伏見に住ひ、寛永十一年四十一歳で死んだと云ふ。若しこれが正しいとすれば、世間に傳へられた彼の逸話は大抵虚偽になるのである。指しづめ伏見桃山城の落成は文祿三年即ち左甚五郎誕生の年であるから、桃山の建築や彫刻に彼が關係する筈はない。次になほ最も人口に膾炙して居る二三の例を擧げて見よう。

◇

一は京都知恩院本堂の軒下の抖拱の間に挟まつて居る骨斗りになつた傘で、これは左甚五郎が置き忘れたのだと傳へられて居る。この本堂は寛永十六年に出来たもので、屈指の名建築と稱せられて居るが、東南の隅に當つて軒下に傘の残骸が挟まつて居る。これを左甚五郎に附會したのは、この傘に由て觀衆の眼を堂の軒廻りに引きつけ、傘と比較してその構架材の如何に巨大であるかを感じせしめ、同時に抖拱が如何に精巧なる組み方に成つて居るかに注意せしむる爲であると解する説は頗る要領を得て居ると思ふ。併し甚五郎は既に五年前の寛永十一年に死んで居たのである。

◇

二は日光東照宮の眠猫である。傳説によれば、甚五郎は一生の内に只だ二疋の猫を彫つた。一疋は大阪の四天王寺に在つて牝であり、一疋は日光に居つて牝であると云ふ、東照宮は寛永十一年起工、同十三年の竣成であるから、甚五郎死後の造營である。眠猫は本殿の周圍の廻廊の東南部、奥の院に通ずる路に當る開口の上の蟻股の中の彫刻で、成る程よく出来ては居るが、別に非凡の技工として驚歎すべきものでもない。之を甚五郎作として

日光第一の名物にしたのは、恐らく人の眼をこゝに集中すると同時に、人の足を奥の院に向けしむる爲であらう。奥の院の入口は廻廊の東南部凹入した處にあるので、人足が自然遠くなり勝ちである。此處に眠猫を置いて招き猫に利用した遣り口は中々巧妙であると思ふ。

◇

なほ甚五郎に關する傳説中で多少重要視すべきものは、近衛三藐院信尹が自邸の唐門の扉の一方は甚五郎に、一方は當時の巨匠甲良宗廣に命じて彫刻を施さしめた。然るに其成績は甲良の方が優つたので、彼に豊後の稱號を興へたと云ふのである。甲良豊後宗廣は徳川幕府の大棟梁で日光廟建築の技師長である。若も甚五郎の技倆が甲良に及ばなかつたとすれば、彼の手腕も亦た知るべきものであらう。尤も近衛信尹は慶長十九年に薨じた人であり、彼が門に彫刻せしめたのはその數年前であると假定すれば、甲良は四十五六歳の練達の時代、甚五郎は十五六歳の小僧であるから相撲にはならなかつたかも知れぬ。

小堀遠洲と桂離宮

我が茶道や生花に遠州流と云ふ一派を開いた小堀遠江守政一に關する逸話は、隨分人口に膾炙して居るが、就中彼が一生一代の傑作と稱せらるゝ京都の桂離宮の庭園乃至茶室は、兎に角大に觀るべきものがある。これに就て例の如く一條の傳説が語り傳へられて居るが、夫は左の如きものである。

◇

桂離宮は豊臣秀吉が小堀政一に命じて考案實施せしめたものであるが、小堀はこの命を受けたとき秀吉に向つて三個條の條件を提出し、この條件が容れられたならば引き受け様と申出た。その一は意匠考案に就ては絶対に他の容喙を許さないこと、その二は竣功期限や工費に制限を設けぬこと、その三は工事中絶対に見に来て呉れるなと云ふことであつ

た。寛大な秀吉は欣然として之を承諾したので小堀は丹精を抽んで、思ふ存分にその技倆を揮つたので、あの様な美しい庭園や茶室などが大成したと云ふのである。併しこの傳説が全然虚構であることは甚だ明瞭である。

抑々小堀遠州なる者は、天正七年の生れで、始めは秀吉に仕へて居たが、後には徳川家康に仕へた。豊臣滅亡後、元和九年に伏見奉行となり、在職二十五年間、頗る治績を挙げた。茶道は千の利休の門人吉田重能に就て學び、終に一家を成したのである。彼は所謂萬能の人で、茶道以外に總ての美術工藝に精通し、殊に繪畫は狩野探幽と親交のあつた關係から狩野流の畫を能くしたと云ふ。正保四年二月六日六十九歳で死んだ。

◇

この年譜から算出すると、秀吉の薨じた慶長三年には、小堀はまだ二十歳の少年である。さて又桂離宮は天正十五六年頃、即ち小堀が九歳か十歳の頃、秀吉が正親町天皇の皇子陽光院の第六子智仁親王を請ふて猶子とし、八條の宮と稱してその別墅を桂の里に造營したので、今現存する舊御殿は即ちこれである。新御殿茶室庭園は、二代智忠親王の時、

徳川氏が小堀に命じて造らしめたもので、寛永の初年に完成したと云ふが、これは眞實であると認められる。即ち元和の終か寛永の初かに、伏見奉行たりし小堀が造つたので、秀吉とは全然關係がない。若し小堀が三個條の注文を提出したとすれば、夫は二代將軍秀忠か三代將軍家光に對して試みたものでなければならぬ。

◇

小堀の三個條の要求なるものは、畢竟藝術家の理想を事に托して假作したので、之に類似の傳説は古今に珍らしくない。今日に於ても富豪が趣味の爲に造營する邸宅庭園類には、工費と期限に制限を設けぬ例もあるが、意匠考案を技師に任せて干涉しない例は殆んど無い、況んや工事中絶對に見に來ないと云ふ條件は到底成立しそうもない。官公の造營に至つては一から十まで干涉づくめで、殊に會計法で縛られるから碌なものゝ出來よう筈はない。さばれ桂離宮の庭園建築は餘りに巧である。寧ろ巧に過ぎる。これ遠州の長所に於て同時に短所である。

鳴龍

日光東照宮の本地堂、即ち徳川家康の守本尊なる薬師如来を祀る佛堂の内陣の天井に、狩野永真筆と稱する墨繪の龍が蟠まつて居る。この龍の頭の下に立て拍手すると、之に應じて天井でビリ／＼と震へ聲の反響が聞える。是が即ち日光名物の一なる鳴龍で、多くの見物人を驚かせ又は喜ばせて居る。

この反響は龍の頭の下で拍手しなければ起らぬのみならず、その音響は龍頭の直下でなければ聞えない。これは何故であるか、久しく疑問とされて居たが、今以つて誰も的確に解釋を與へて居らぬ。會て或は龍の頭に當る處の天井板に龜裂があるか、或は龍を描いた紙が破れて居る爲に、そこに震動が起るのであらうと想像されたが、實際の調査によつて紙にも板にも異狀が無いことが慥かめられた。

◇

曩に早稲田大學建築科の教授佐藤武夫博士が精密なる調査を遂げて、その真相を闡明されたが、氏は堂の天井板が偶然龍の頭の處で微かに彎曲して上つて居ることを發見された。誇張的に云へば天井の一部が下から見て球體若くは橢圓體類似の形に彎入して居るので、拍手の音波がその凹底に中り反射してその人の頭の邊に集中する。鳴龍の正體は即ち之であると云ふ事である。なほ同氏の調査によれば、此種の類例はなほ他にもあると云ふ事である。

最近余の知人某氏からの報告によれば、某氏逗子の別墅に於ける一室に於ても同様の現象があるといふ。夫は普通の木造の純日本風の家であるが、疊を撤去して床板を露出した上で拍手すれば、之に應じて天井に反響が起り、疊を敷き込めば消滅すると云ふのであるが、成る程有り得べきことである。

◇

要するに鳴龍は單純なる反響であつて、別に何の不思議も無いらしい。反響は床と天井

の間に限るのでなく、壁と壁との間にも起り得る譯であり、又その響音の性質も四圍の状態や音源の位置や、その他種々な條件に由て無究の變化を生ずる譯で、之を徹底的に研究することは専門的の大事業である。

日光の鳴龍は何時頃發見されたかよく分らぬが、明治三十何年かであつたと記憶する。この建築は創立以來幾度か修繕されて居るが歲月を経るに従て天井や床の面に異動を生じ、いつしか偶然にも斯の如き奇蹟的現象を見るに至つたものと思はれる。さるにても夫が丁度畫龍の頭の所であるが爲に獨り本地堂をして名を成さしめ、日光の財源の一たらしめたのは僥倖の様でもある。併し今後この建築に大修繕を加へたならば、或は畫龍は沈黙するかも知れぬ。若し日光の當局者が、名物を失ひ財源を失ふことを恐れて修繕を加へず、終に荒廢に陥らしむることがあらば、これ日光の禍である。

龍

支那に於て創案された龍なるものは一體何から暗示を得たか、未だ何人も明答を與へて居らぬ。或は前世界の巨大なる爬蟲類の或る種類から暗示を得たと考へ、或は今も南洋方面に棲む大蜥蜴の一種から案出したと想像し、或は鰐から轉化したと推斷して居る。

◇
一體支那で龍といふ文字の見へるのは何時からであるか、之を文獻に徴すれば、伏羲氏の時龍瑞が有て、龍を以て官に紀したと云ひ、黃帝の時龍が胡髯を垂れて迎へたと云ひ、禹の時黃龍船を負ふと云ひ、孔甲の時二龍天より降ると云ひ、孔子は老子の捕捉し難い老怪の人格を龍に比して嘆息した。斯くの如く龍に關する記録は太古からあるが、さて龍の形を畫き又は彫刻した實物は後漢以前には見當らぬ。周禮によれば周の天子の正裝にはそ

の衣に龍が畫かれ、爾來龍は天子の表象となつたが、その正體は不明である。周の銅器には龍の兒と稱する螭・虬・虵などの文様はあるが、夫は不得要領の蛆蟲の様なもので、肝腎な龍は更に見へない。

後漢以來始めて現はれた龍の姿は、今日の龍とは似ても似つかぬ動物である。夫は山東の武梁祠の畫像石や、四川省の各地から發見された墓の石闕や、その他の漢碑の螭首等にも見へ、鏡や軛の裝飾文としても現はれるが、頭は獸の如く、双角を備へ、反轉せる長唇を翻へし、長き髯と鬚を振ひ、四肢と軀體は爬蟲に近い、往々翼を備へて居るが、夫が後には變化して火焰の如き形となつた。



龍の風貌は唐代に於て最も優秀であつたが、宋以後漸く變化し、古への深刻神祕の氣韻を失ひ、形は追ひ／＼蛇に近づき、顔は徒らにとげ／＼しくなつて今日に及んだので、日本に於ける龍の變遷も之と大同少異である。

奈良朝の神韻漂渺たる龍と、江戸時代の狩野家の衝氣滿々たる龍とは到底日を同じくして

語るべきでない。

要するに、龍は支那人の創作せる空想的動物で、地を走り、空に翔り、水に潜み、出沒自在の神通力を表はす爲に一種の混成的生物を考案したのである。故に龍には一定の型が無い。角が一本でも二本でも、夫れが牛の如くでも鹿の如くでも、髯は鯰の如くでも螺螄の如くでも、顔が駱駝の如くでも鼻が獾の如くでも手足が軍鶏の如くでも一切作者の意匠に任せて構はぬのである。

龍に似た怪物の考案は支那以外にも類似が多い。印度のナーガも龍と譯され、西洋のドラゴンも龍と比定されて居るが、支那の龍とは根本的に構想を異にする。ナーガはコブラと云ふ毒蛇から案出したので、一頭から九頭まであるが、形は餘り美化されて居ない。ドラゴンは爲體の知れぬ醜怪なる惡魔で、何等藝術的に妙味が無い。流石に支那の龍は古代に於ては得も云はれぬ雄偉なる威容があつたが、夫も追々醜化して今日の様な卑俗なる怪物となり果てたのは洵に悲惨な運命である。

鳳

支那で創造された神靈的動物の兩横綱は龍と鳳である。鳳は鳳凰の略だとも云ひ鳳と鳳は雄雌の別だとも云ひ、色赤きは鳳で青きは鸞だなども云ひ、例に由て諸説紛々である。

鳳は聖人が出なければ現はれず、梧桐に非ざれば棲まず、竹實に非ざれば食はず、醴泉に非ざれば飲まず、羽毛五色にして聲五音に中り、世に道あれば見はれ、飛べば群鳥之に従ふと云ふ。

鳳の起源が何であるかは明かでないが、その字音が Phong であるが爲に、之を埃及の Phoenix から出たと附會する説もある。Phoenix はアラビアに棲む鸞に似た靈鳥で、六百年目に一度ヘリオポリスの神殿に來り、自ら身を焼いて灰の中から再び雛となつて現はれる。

即ち彼は不死、又は永久を表徴するものとせられて居る。この埃及人の Phoenix に對する思想と支那人の鳳に對する思想とは全然異なるもので、その字音の類似を以て同根と考ふるのは甚だ早計であると思ふ。

鳳の姿は既に周代の銅器に鳳紋として現はれて居るが、全く文様化して居て正體は不得要領である。漢代には朱雀として鏡・碑・甗・闕等に青龍と共に現はれて來るが、これも甚だしく便化されて生物的本質が晦まされて居る。唐に至つては立派な風貌となり如何にも鳥類の王らしい態度となるが、夫から段々低下して品位を失ふことは龍と同様である。

茲に面白いことは唐の德宗の崇陵に石鳳とて石に鳳を刻したものが立つて居るが、その鳳が慥かに駝鳥である。之は德宗が愛飼して居たので、德宗の死後その靈を慰める爲に石に刻して陵前に供へたのであらうと解せられて居る。然らば鳳は駝鳥から暗示を得たか、否そうではあるまい。漢の武帝の上林苑に飼養されて居た條支の鳥と云ふのは駝鳥だと思

はれるが、それ以前にも支那に傳はつて居たかも知れぬ。併し支那で鳳を空想したのは更に夫よりも遙かに古いと認めねばならぬ。但し鳳には『大鳥』の意があつて、駝鳥の如き巨大な鳥は譯もなく之を鳳と稱したであらう。

◇ 要するに鳳は常識から考へて、孔雀、錦鶏、樂土鳥等の美鳥から暗示を得て、之を極端に修飾し誇張したのであらう。孔雀の孔は大の意、雀は鳥の總稱である。然らば孔雀は即ち大鳥、即ち鳳ではあるまいか。只だ鳳凰の文字は慥かに外國語の音譯であると思ふ。即ち何等か鳳凰の漢音 Phong Whang に近い名を有する孔雀の種類の鳥が何國にか有れば夫れが即ち鳳の起源であることは疑ひない。

◇ 日本では鳳は飛鳥時代以來連綿として或は彫刻に、或は繪畫に、或は文様に、各種の方面に賞用され來つたが、飛鳥の古勁、奈良の雄渾、平安の優麗とりどりに面白い。爾來漸次に衰頹し、今日に至つては只だ古への殘骸を遺すのみである。

麒 麟

支那の瑞獸の一なる麒麟は、勿論空想的動物であるが、その文字は外國語の音譯であることは明かである。元來漢語は單綴一字主義で、二字以上を連ねて一語とするものは無い、若しあればそれは形容詞或は修補字を前後に附加したものであるか、或は二語以上の合成である。同じ偏や冠を有する二字連続の物名は殆ど總て外國語の音譯で、その偏や冠は所屬を示すのである。麒麟・狡狴・駱駝・瑠璃・葡萄・苜蓿等數ふるに違がない。

◇ 麒麟の古音はキラムであらう、キラムはキラフと普通である。然らば麒麟の起源はギラフ又ジラフであらう。ジラフは今ではアフリカ内地に限つて産するが、太古も今の如くであつたか否かを知らぬ。又ジラフの語源が何處にあるかも知らぬ。要するにジラフが古代に

於て支那に傳來したとき、漢人が之を見て其稀有の珍獸なるに驚き、例の空想を逞うして之を瑞獸とし、之を靈化して奇怪の姿に作り上げたのであらう。

漢人の空想に従へば麒麟は聖人の出る瑞兆として現はれ、生草を履まず、生物を喰はず、形は鹿の如く、尾は牛の如く、蹄は馬の如く、頭は一角ありと云ふから大體ジラフに似て居るのである。但角が一本であると云ふ點が不思議である。

支那の古圖に現はれた麒麟は鹿の類の如く、ヤムジラフにも似て居るが、後世に至るに従て追々變化し、果は頭も胴體も龍の如く、尾は唐獅子の如くなり、肩に火禱をかけて居るが之が翼から變化したものである。日本では麒麟の彫刻や繪畫は主として桃山時代以後に實例を見るが、元來六ヶ敷い混成獸であるから古來傑作と稱すべき程のものは見當らぬ様である。明治末年頃と記憶するが、東京の日本橋の欄杆の親柱につけられた麒麟の如きは蓋し醜劣の極に達した悪作であらう。

◇

支那で古來麒麟を捕獲した傳記がある。たとへば孔子が春秋を作り、筆を魯の哀公十四

年、西狩して麒麟を獲たるに絶つと云ひ、漢の武帝は麒麟を獲たとて閣を作つて其像を畫かしめ、之を麒麟閣と名けたと云ふ。宣帝の時匈奴が服従した記念に、功臣十一人の像をこの閣の壁面に畫かしめたことは有名である。併しこの傳記の麒麟が如何なる動物であつたかは不明である。

支那式の麒麟の圖は、支那系の文化を傳へた地方には往々その例を見る。殊に土耳其、波斯方面にも之を發見するのは甚だ興味ある事である。波斯では第十五六世紀以後の陶磁器や織物の文様に現はれて居るが、土耳其では北叙利亞のハレプ市の某舊家の壁に畫かれてあるのを見た。これは家人の話ではその當時から約五百年を経て居るとの事であるが、實に珍らしく感じた。

麒麟の姿も、龍や鳳と同じく勿論一定の型は無い。如何なる姿に作つても誰も咎めはせぬが、今日に於てその普通の型とせらるゝ所は、先づ麒麟ビールの商標に描かれて居る様なもので、誠に藝術味の乏しい醜怪なる動物である。現今の支那に於ても同様甚だしく低級に墮ちて居る。

狻 猊

狻猊は獅子である。獅子は梵語で Simha であるが又 Sinha 或は Singha とも發音される。狻猊はその音譯であり、獅子はその頭の Si を取つた略稱である。

元來支那には獅子は産しない。文獻に徴すれば古い處では後漢の章帝章和元年に安息國から、翌年月氏國から、和帝の永元十三年安息から、順帝の陽嘉二年疏勒國から各々獅子を獻じて居る。即ち西方亞細亞、中央亞細亞、西北印度等から傳來したのである。

始めて獅子を見た支那人は驚くと同時に喜んで相違ない、そして之を百獸の王として畏敬し、魔を卻け鬼を防ぐの靈獸として、例に由て空想化したのであらう。

獅子の最初の遺例は恐らくは後漢の武梁祠の前に一對据ゑられた石獅であらう。夫は可

なりよく獅子の特徴を捕へて居る。魏の曹操が造つた銅雀臺の遺趾から發見された石獅は更に寫生に近い趣があつて實に面白い逸品であるが、これは今東京の大倉集古館に藏せられて居る。

六朝以後の實例は無數である。六朝の翼ある獅子は蓋し最奇抜なものであり、唐の獅子は最形の整つたものであるが、既に大に寫實に遠ざかり、所謂唐獅子、狒犬などの型に進んで居る。宋以後意匠も工作も漸漸に低下して今日に至つたことは他の工藝と同程である。

獅子の彫刻・繪畫・文様等に於て最も意匠の豊富なるはサラセン系の藝術である、夫は獅子の産地であるからである。之に次ぐものは、印度系、又之に次ぐのが支那系で、日本は支那系であるが、獅子の實物を見たことは無い爲に、しきりに空想を畫いたのである。夫も例に由て奈良朝頃が最雄健であつたが、時と共に低下した。神社によく見る狒犬なるものは蓋し獅子から一轉したものである。

さて獅子の語源が梵語の狻猊であるから、印度地方には狻猊に因む地名が少なくない。錫蘭は古へシンハラ國と云つたが獅子國と譯されて居る。シーロンは即ちシンハラの轉訛である。印度内地にシンハブラ即ち獅子城といふ地名が數ヶ所にあり、後印度にも一つ有名なのがある。夫は即ち昭南の舊名シンガポールで、本來シンハブラ又はシンガブラと云ふべきである。之を新嘉坡と音譯するのは可笑しいので若し古典的に云ふならば狻猊城、略して云ふならば獅子城である。

獅子と佛教とは深い關係がある。釋尊の座の下に獅子が居るので之を獅子座と云ひ、釋尊の説法を獅子吼など云ふ。文殊菩薩はよく獅子に騎つて居る。斯くて佛教國では獅子に對して或る信仰を有ち獅子を刻し又は畫くにも敬虔の念を以てするから自ら寫實を離れた神祕的なものになる。西洋では兎角之を單なる猛獸として取扱ふから、形は巧に出來ても、そこに何等の妙味もない。

葡 萄

葡萄は元來裏海の南部から、カウカサス地方に産したもので、夫から西方亞細亞・埃及・希臘方面に弘布され、終に全世界に蔓延したのだと稱せられて居る。支那へ初めて葡萄の輸入されたのは前漢の武帝の時、博望侯張騫が月氏に使用して匈奴に囚へられ、後囚を脱し、月氏の跡を追ふて今のソ聯領トルケスタンに入り、更にペルシアに入て西亞の事情を窮めて漢に歸つたが、彼は西亞の多くの文物と共に葡萄を漢土に傳へたと云ふのである。

葡萄の文字は例の如く希臘語ポトルスを音譯したものである。最初は蒲桃と書いて居たが、蒲陶又は葡桃と書いたものもある。日本に傳はつたのは何時であるかよく知らないが、裝飾文様に現はれた處では南都薬師寺の金堂内の本尊薬師如來の臺座に鑄出してあるのが

最古であると思ふ。年代は白鳳時代である。これは葡萄が珍菓であり、之を食へば薬餌として壽を延ぶと云ふ信仰から、薬師如來に聯關させたのであると解し得るかも知れぬ。

この「葡萄から草」の形式には西亞乃至東羅馬の氣分が現はれて居るのは、歴史的に見て甚だ面白い現象である。

支那では海獸葡萄鏡又は海馬葡萄鏡とて、裏面に何やら怪獸と葡萄から草とを現はした鏡が葡萄を適用した最初の物であると思はれる。これは一般に六朝から行はれたと考へられて居るが、支那では古來漢に初まると言ひ傳へ今日、でもこの説を固守する一派がある。

西亞以西では數千年前から葡萄を裝飾紋に使用して居る。その古さは的確には知り難いが、埃及では五千年前既に葡萄から酒を造つて居たと云ひ、少くも三千年前と認められる遺物に葡萄の圖様が見へる。亞述利亞、波斯、希臘等にもその太古時代から實例がある。

◇
葡萄の種類は非常に多い、支那では何時頃から知らぬが、黄・白・黒の三種に區別し、黄を蒲陶、白を馬乳、黒を黒水晶と稱した。今日では世界一般に葡萄の種類を大別して赤・白・黒の三種として居るが、日本産では甲州葡萄が最も有名で赤種に屬して居る。葡萄に關聯して一小笑話を添へる。予の知人某君一ツも外國語を知らずして歐洲漫遊を試み、佛國の某旅館に投じて夕食の卓に就き、さて葡萄酒を命じようと思つたが言葉を知らない。いろいろ考へた末、ポルトガルを葡萄牙と書くことを思ひ出し。必定葡萄はポルトに相違ないと考へ、給仕にポルトをと命じた處が、物の美事に命中して、給仕は早速ポルトワインを持って來た。

◇
某君は得意満面でこの事を知人に吹聴し、これだから外國語は知らずとも結構用は辨ずると誇つて居た。勿論葡萄牙は、ポルトワインの主要なる生産地である。

酒

世界に於ける酒の始まりは知らないが支那では禹の時儀狄が始めて酒を造つたといふ。禹之を飲んで美しとし、後世必ず酒の爲に國を亡す者があるだらうと言つて、終に儀狄を疎んじたといふが、儀狄こそよい迷惑である。

◇
爾來四千百餘年、果して酒の爲に身を亡ぼし、家を亡ぼし、國を亡ぼした例は無數であるが、また之が爲に身を興し家を興した例も澤山あつて、酒に關する逸話は限なく豊富である。孔子でさへ、只酒は量なし、亂に及ばすと曰はれた位で、時には百藥の長と賞せられ、天の美祿と稱へらる。酒の利害は微妙なる實際問題で、一片の理屈では片付けられぬ。

◇
酒に關する挿評の一として茲に支那の昔話を擧げて見よう。北宋の仁宗から神宗の代に、有名なる王安石と司馬溫公とは時を同ふして世に重んぜられたが、安石も溫公も大の下戸であつた。或時さる處に饗宴が設けられ、兩人共に之に臨んで席を列ねた。主人は二人に酒を薦めたが、安石は辭して受けない。薦むること再三に及んでも彼は頑として受けない。主人も終に強むることを得ずして止めた。溫公も始めは固辭して受けなかつたが、主人の要請極めて懇切であつたので、終に枉て一盃を手にした。之を見た列座の客は、安石の剛愎にして意志の頑強に驚くと同時に、溫公の溫情の深きに敬服した。宴果て、後溫公は、安石の態度の強硬なりしに引きかへ、己の意志の薄弱なりしを耻ぢ、我終に安石に及ばすと歎息したと云ふ。

しかも安石はその剛愎に祟られ、その政策は天下の怨を招き、終に逆境に陥て悶死したが、溫公の徳は普ねく世人の敬慕する所となり、功成り名遂げて終を全うしたのである。この二人の性格が一盃の酒に由て現はされたのは面白いではないか。

之に對して茲に頗る科學的な挿話の一つを擧げて見よう。古い昔、大學工學部で職員學生打ち連れて日光へ遠足を企て、某館に晚餐の宴を開いた。團長格の中野初子博士が上座に陣取て頻りに盃を傾むけて居る所へ、一學生が押しかけて來て獻酬を請ひ、さて先生はどれ程お飲みになるかと問ふた。博士はニツコリともせず、いくらでも飲むと答へられたので、學生は呆れ顔、でも大抵酒量に限があるでしやうと反問すると先生は「馬鹿ツ」と一喝して置いてさて破顔微笑、酒量は時間の問題だ、時間を規定せずに酒量を問ふのは馬鹿である。學生に似合はぬ愚問である。無限の時間に飲み得る酒量は無限ではないかと言はれたので、學生は恐縮して引き下つたが、如何にも中野博士らしいとて、聞いて居る人々がさどめいた。

今一つ奇抜な話。或る酒客が健康を損して醫師から一年間禁酒を命ぜられた。酒客は迷惑そうにやゝ暫く思案した後醫師に對ひ、二年間隔日に飲んで如何か？

茶と茶室

茶の原産地は一ヶ所ではない。支那では中國が原産地で、夫から印度方面や日本に傳播したと稱して居るが、東印度諸島のジャヴァや、印度のアッサム地方も茶の原産地であると云はれて居る。畢竟茶に色々の種類があるからで、何れも原産地であらう。併し茶の文字が支那固有の一語一綴であるから外國語の音譯でなく、英・佛・獨等の茶の語音が漢音の轉訛と想はれるから、茶は支那から世界的に廣がつたと解せられる。

支那で茶を喫み始めたのは唐からであると云ふ。唐の陸羽の茶經には詳細に茶の講釋が述べてある。日本では天台宗の開祖傳教大師が入唐して將來したに始まると云ふが、その後中絶したらしい。鎌倉時代の始めに、臨濟宗の開祖榮西禪師が宋から將來して以來、茶

は漸次に日本に廣まり、足利氏時代に至て始めて喫茶の作法が出来た。

茶と禪宗とは密接なる關係がある、喫茶の趣味と禪味との間に一脈の相通するものがあるからで、知名の茶室は多くの禪刹と相伴つて居る。大徳寺の孤蓬庵・眞珠庵等の茶室、建仁寺の如庵、鹿苑寺（金閣寺）の夕佳亭、高臺寺の時雨亭、傘亭など類例は甚だ多い。

喫茶の作法即ち茶道、俗に所謂茶の湯の濫觴は、足利義政の經營した東山の慈照寺（銀閣寺）の東求堂内の四疊半の一と間であると云ふ。茶道の宗匠の元祖は、義政と同時代の珠光であり、紹鷗から宗易即ち千の利休に傳へて大成した。

◇

茶道は以前は専ら王侯貴人の遊嬉であつたかの觀があるが、利休以來普く士民の間に行はれる様になり、其直系の三代目の宗且から、宗左の表千家、宗室の裏千家が分立し、なほ色々の別派が簇出し、江戸時代を通じて茶の大流行となり、終に日本全國津々浦々の各家庭に於て、茶を喫まぬ者は一人もない様になつた。

◇

喫茶の作法を行ふ室を茶室と云ふ。又茶席と呼ぶ人もあるが、茶室と茶席とは同じではない。茶室は一室に興へられた名稱であるが、茶席は茶室を有する獨立の一棟である。併し茶席は普通の住宅ではなく、茶室を本位として之に若干の房室を配置したものである。その建築は元來書院造から出たので、之を崩し之を碎き、風雅簡素の趣味を發揮し、閑寂なる庭園と相俟つて、藝術味の豊なる特殊の建築を大成したのである。

◇

斯くて茶席茶室の出現と共に、我建築界に一大紀元が劃せられて、今迄は主として嚴めしい楷書の書院造の世の中であつたのが、一轉して風流な行草の茶的建築の世界が現はれたのである。同時に之に關聯して、茶に伴ふ工藝や美術の趣味が鼓吹せられ、江戸泰平の時代を飾つたのであるが、またその餘弊も少なくなかつた。兎に角吾人常住の日本風の家が今日まで發達して來たのは、偏へに茶のお蔭であるといふも過當では無い。

◇

日本に於て喫茶が斯くの如く藝術化せられたのに引き替へ、本家の支那では茶に對して

頗る無頓着であつた。之が爲に特殊の作法の出現も見ず、従て建築界に多くの影響も興へず、美術工藝振興の副作用も起さなかつた。日支の國民性の差は斯かる方面にも現はれて面白。

煙草

煙草の原産地は一般に南米にありとせられ、その原音 Tobacco は今や煙草の普及と共に世界共通となつた。支那では明時代に始めて呂宋から傳來したと稱せられ、始めは Tobacco を音譯して淡巴菰又は淡婆姑と書いたが又菸草とも云ひ、又蒿の字を當てたものもある。日本では何故に苳の字を慣用し來つたか、今日では和漢共に煙草の字を常用して居る。

◇
日本に煙草の渡來したのは天正の頃葡萄牙人によつて輸入されたと云ひ、慶長十年種子を長崎の櫻の馬場に植ゑたるを嚙矢とすると稱し、又は慶長の初年薩摩の楫宿に植ゑたるを濫觴とすと唱へ、何れが正しきかを知らぬ。

◇
歐羅巴に傳來したのは一五五八年西班牙王フィリッポ二世の時メキシコ探險隊が彼地から將來したと云ふ。英國の傳來は一五八六年にアメリカに旅行したローリ(W. Raleigh)なる者がヴァージニアから將來したと云ふ。米地には太古から喫煙の風があつたことは北米合衆國・メキシコ・ペルー等の有史以前の墳墓内から煙管が発見せられた事實に由て推知せられ、コロンブスがアメリカ發見當時、住民が喫煙して居るのを見たを記録されて居る。

喫煙の道具は、日本では煙管と莩入と煙草盆とが必要品であつた。煙管の語音キセルの語原はよく分らぬ。或は西班牙語の管から出たとも云ひ、或はオランダ語から轉訛したとも云はれて居る。キセルのラウ(羅字)の語原もよく分らぬ。或は最初老樞國産の竹を用ゐたに由ると云ふが、餘り當にはならぬと思ふ。

◇
莩入は江戸時代貞亨の頃始めて油紙で作出し、緞子・繻紗・更紗等で作り出したのは

享保頃であると云ふが、爾來急速に流行すると同時に種々な型が案出され、果は趣向を凝らして巧を競ひ奇を争ひ、爲に莫大な價を費す様になつた。

支那では煙管の外に煙臺を賞用した。これにも彫縷を施したり七寶や象嵌で裝飾したものであるが日本の如き豊富なる趣味は無い。予の經驗によれば、支那大官の煙管は往々長さ三尺乃至四尺にも達するものがある、自分で操縦することが出来ないので、必ず傍に從者が侍立し、主人の爲に雁首に裝填したり點火するのであるが、如何にも支那氣分が現はれて面白いと思つた。安南では天秤棒を煙管に兼用し、荷を卸して休むとき、棒の先へ煙草をつめてスパリスパリやるのを見た。これは慥に五尺位の長さであつた。

◇
近頃昔の刻み煙草は零落し、巻煙草の時代となつたので、巻莩入には相當意匠を凝らしたもので、精巧な立派なものもあるが、昔の煙管・莩入・煙草盆の妙趣味は最早見られなくなつた。歐米の喫煙具のことはよく知らないが、何としても東洋程の凝つたものは無さそうである。

火 事

可燃質材料で家屋を造る以上、火事は當然免るゝことの出来ない災難であるが、都市の發達と並行してその災害が増進する。そこで消防の方法を研究し、不燃質の材料で家屋を造ることを考へる。斯くて大火は次第に減少する。

◇

日本に於ける古代の火事の記録は極めて断片的であるが、江戸時代から可なり明瞭になる。江戸時代の火事の兩横綱は明暦と安永の大火である。前者は明暦三年一月十八九日の二日に亘つた所謂振袖火事で、本郷丸山から三田札の辻まで焼けたので、恐らくは數萬戸を灰燼に歸せしめたらうと思ふ。安永の大火はその元年の十二月二十九日目黒の行人坂から千住の大橋まで延焼したと云ふから、之も前者と同程度のもものと想はれる。この外これ

と伯仲の間に在る大火は少なくなかつた。例へば享保十年二月十四日の火事は青山から谷中金杉まで延焼し、文化三年三月四日のは高輪泉岳寺から淺草まで燃へ抜けたと云ふ、その他數萬戸を焼いたと思はれる大火は實に十數回の多きに上るのである。何故に斯様な大火が頻繁に起つたかと云ふと、第一は勿論江戸名物の烈風の爲で、夫は必ず常に東南乃至東南南、又は西北乃至西北北の方向であつた。第二は家屋の大多數が草葺又は板葺であつた爲に、火の子が先へ先へと飛び移て、同時に幾ヶ所からも燃へ上つた爲である。第三は消防の方法が幼稚であつたのみならず、鳶の者や役人共も只景氣よく騒ぐ斗りで眞剣味を缺いた場合もあつたからである。火事は江戸の花などと云つて寧ろ自慢にして居た位のものである。

◇

明治以後は眞剣に火の元用心と家の構造の改良に努力した結果、大火は漸く減少し、昔は數千軒を焼かなければ火事らしい氣分にならなかつたが、今は百軒焼けても大火だと驚くやうになつた。夫でも明治の初年に一萬戸以上焼いた大火が二度あつた。一は十二年十

二月廿六日の日本橋箱屋町の大火で一萬四百九十三戸を焼き、他は十四年一月廿六日の神田松枝町の大火で一萬六百卅七戸を焼いた。

その後非常の大火は無かつたが、彼の大正十二年九月一日から三日にかけての大震火災は特別の場合であるが東京全市の四割四分の面積を焼き拂ひ、約七割の家屋を烏有に歸せしめた。恐らくはこれ世界開闢以來の大火で、また恐らくは絶後のものであらう。

世界的大火と呼ばれる外國の數例を比較して見ると、一六六六年七月のロンドン大火は同市の過半を焼いたと云はれるが、其焼失面積は僅かに五十三萬五千坪で、我が東京市の四谷區の三分の二に過ぎない。一八七一年十月北米シカゴの大火は二百六十萬坪を焼いたが、これ連も我が芝區より稍小さいのである。一九〇六年四月の桑港の大火は三百六十八萬坪を焼いたが、これも本所深川兩區を合せたものよりは小さい。即ち大正十二年の東京の大火は既往の大火とは全然比較にならぬものである。

◇ 彼の火震火災の焼け止まりの原因の統計を見ると、バケツ手桶に由るものが一五・四九

%であり、ポンプに由るものが一〇・五六%であり、破壊消防が二・四九%土塊瓦を投じて防いだのが〇・七%で、その他は總て自然鎮火である。器械力に由るものよりも筋肉的努力に由るものが遙かに多かつたのは、大に吾人の注意すべき處であると思ふ。

地震

地震は日本開闢以來の名物であるから、太古に於ても頻々として烈震が起つた譯であるが、之に關する傳説記録は乏しい。第一神話に地震を暗示するものが無い。尤も、恐るべき天變地異は一切素盞鳴尊一人で引受けて居るかの觀があり、地震も、火山の爆發や暴風雨と共にその中に包含されて居ると解し得られるかも知れぬ。

記録上では孝靈天皇の五年に近江の地が裂けて琵琶湖を生じ、駿河に富士山が噴出して近國が夥しく震動したと云ふを手初めに、追ひ／＼地震關係の事蹟が現はれるが、後世に至るに従て具體的となり詳細となる。最近大正十二年九月一日の相模灣の烈震を體驗した國民は今更の様驚いて爾來地震の印象は深く國民の頭に刻まれた。



日本が古來木造建築で一貫し來つたのは、震災に對する考慮から出たと云ふ説は數十年來唱へられ今も之を信ずる人が少なくないが、これは非常な錯誤であると思ふ。元來地震が人間に悲惨な災害を興へるのは都市の發達に伴ふ家屋の密集、巨大なる建築物の聳立と震災に伴ふ火災とが主因であり、比較的近代の事である。古代に於て矮屋が三々五々散在して居た時には誰も地震の怖るべきことを感じなかつた。地震よりも頻繁にしてより恐ろしかるべき火災に對してさへ、近頃まで無關心であつた我國民が、何で古代から特に地震を考慮すべき。日本の建築が古代から木造單層の原型として來たのは別に理由がある。



記録に現はれた處では、日本で地震に對して建築上特に考慮した形跡は江戸時代の柳營に地震の間と云ふ特別に堅牢な一室が造られたのを最初とする。安政の大地震の後、安政二年十二月に、江戸の町醫者小田東叡なるものが防火策圖解と云ふ一書を著したが、その中に彼の案出した耐震構造を圖解して居る。夫は柱の間に筋違貫を入れる法であり、洵に合理的な簡單なことであるが、普ねく行はれた形跡はなく、最近に至てもなほこの方法が

慣用されぬのは、即ち我國民が如何に地震に對して無關心であるかを語るものである。



近頃鐵骨及鐵筋コンクリート構造が耐震的に最も有利であるとして普及されつゝある。勿論夫に相違ないが、要は構造法と施工法の如何によることで、同時に地震に由つて起る建築のあばれ方を的確に知るにある。今や我國の地震學は今村博士その他の専門家の努力に由て世界第一の位置に達し、遠からず地震豫報の可能なことが釋明されそうであると云ふ處まで進んだのである。併し實際問題として随分六ヶ敷そうであるが、若し完成されたら世界最大の功績の一である。



餘話であるが、地震の和語「ない」の語原、地震の原因を餘に附會した動機に就ては未だ會心の説明を聞かぬが、願はくは識者の教を得たいと思ふ。但し雷の正體を怪獸とし、火の精を妖鳥に託するの例に比すれば、地震の製造者を巨鯨とするのは寧ろ愛嬌があつて面白いと思ふ。

昭和十八年四月十五日印刷
昭和十八年四月廿三日發行

「白木黒木」(二、〇〇〇部)
文協承認ア四〇〇三五九號

定價 三圓五十錢



著者 伊東忠太
編輯者 枝元長夫
發行者 山形初太郎
印刷者 大森清一
東京市芝區新橋一ノ二四
東京市小石川區指ヶ谷町一四六

發行所 北光書房
東京市芝區新橋一ノ二四

電話銀座 七三七二番
振替東京 四七七五三番
文協會員 一三〇〇三六番

配給元
日本出版配給株式會社
東京・神田・淡路町

三十八博士科學動員

B6判三三〇頁瀟洒裝幀
定價二圓五十錢(送二〇)

本邦科學界第一權威之八十三博士之吾々
 身邊之專象對其平易明確之說述之吾々之生活
 在科學的知識與興味之與ふ新しき生活之指針書

醫學博士	醫學博士	農學博士	醫學博士	醫學博士	工學博士	工學博士	理學博士	理學博士	農學博士	工學博士	醫學博士	工學博士	林學博士
佐々木秀一	三宅鏞一	田中阿歌麿	宮島幹之助	宮城音五郎	大熊喜邦	藤原咲平	岡田武松	鈴木梅太郎	依國一	林春雄	伊東忠太	本多靜六	
醫學博士	理學博士	醫學博士	醫學博士	藥學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	工學博士	醫學博士	理學博士	林學博士	醫學博士	
佐々木廉平	武田久吉	三田定則	杉田直樹	朝比奈泰彦	遠藤繁清	近藤乾郎	佐野彪太	密田良太郎	永井潜	草野俊助	三浦伊八郎	二木謙三	
(以上三十八博士 順序不同)	醫學博士	農學博士	理學博士	理學博士	工學博士	理學博士	理學博士	理學博士	醫學博士	理學博士	農學博士	理學博士	醫學博士
	朴澤三二	內田清之助	飯塚啓	中村清二	田中芳雄	福井松雄	中野治房	田中茂穂	高峰博	川村清一	松村松年	千葉眞一	

932
131



18年 5月 22日

✓

終

